



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	エゾオオカミ研究史の検討
Author(s)	梅木, 佳代
Citation	研究論集, 15, 35(左)-67(左)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.l35
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60544
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_004_umeki.pdf



エゾオオカミ研究史の検討

梅 木 佳 代

要 旨

本稿は、エゾオオカミ (*Canis lupus hattai*) に関する従来の研究動向を概観し、個々の論点における現状の到達点と問題点を整理することを目的とする。

日本国内にかつて生息していたエゾオオカミおよびニホンオオカミ (*Canis lupus hodophilax* あるいは *Canis hodophilax*) は、どちらも明治時代に絶滅した。これら在来のおオオカミに対する関心は高く、明治時代以来さまざまな形で情報の発信と蓄積が行われてきた。しかし、その内容や成果の全体が整理されまとめられたことはない。

本稿では明治時代から現在までに刊行された日本のオオカミについて記述がある文献を収集し、そのうちエゾオオカミに言及する 213 件の文献を分析対象としてその研究史を検討した。これらの文献の内容から、従来の知見の多くが限られた事例に基づいて提唱されたものであること、その妥当性の評価が行われていないことが示された。

エゾオオカミに関する研究・議論においては、北海道内にオオカミが生息していた期間の記録や情報、そして確実な標本資料の双方が非常に少ないことが常に議論の前提とされてきた。しかし、専門的・学術的な議論の中ではそうした前提をふまえた「仮説」として提示された記述が、繰り返し参照されるうちに定説と化している。また、限られた情報に基づいて提唱された知見が一般化される一方で、エゾオオカミに関する情報や資料を体系的に収集し、情報を質・量ともに拡充しようとする試みはごく一部にとどまっている。

今後のエゾオオカミに関する研究では、既存の知見の妥当性の評価が求められると同時に、検討対象とするべき情報や事例の数を増やすことが優先的に目指されるべきである。

1. はじめに

エゾオオカミ (*Canis lupus hattai*) は、かつて北海道、サハリン、南千島の択捉島、国後島

に生息したハイイロオオカミ (*Canis lupus*) の亜種である。日本列島内には、ほかに本州・四国・九州に生息していたニホンオオカミ (*Canis lupus hodophilax* あるいは *Canis hodophilax*)¹ が存在したが、どちらのオオカミも明治時代に絶滅した。

エゾオオカミの絶滅年は1896(明治29)～1903(明治36)年の間とされ[山田 2002:86], 1905(明治38)年を絶滅年とするニホンオオカミよりも早い段階で姿を消したとするのが一般的である。日本国内における2種類のオオカミの絶滅は、明治維新後に全国規模で発生したという鳥獣の乱獲をはじめ、国土開発・開拓の進展による生息域の縮小と分断、オオカミの主要な餌動物の減少、さらにジステンパーなど外来伝染病の影響など、さまざまな背景を有する複合的な要因が重複して起きたものと理解される[平岩 1946, 今泉 1995, 中村 2010]。ただし、北海道のエゾオオカミおよび東北地方のニホンオオカミに限っては、明治時代以降「家畜を襲う害獣」や「皇化普及ノ妨害」[中沢 2010:35]として積極的な駆除の対象とされ、過度の狩猟圧を受けて絶滅に到ったと論じられる。

すでに絶滅した日本在来のオオカミに対して向けられる関心は高く、明治時代以来多くの情報発信が行われてきた。さまざまなレベルの多種多様な取り組みがあり、議論が展開される分野も多岐に渡る。しかし、日本のオオカミをめぐる問題は、社会的にも学術的にも「百家争鳴」状態にあって「混迷」しているとする指摘[中村 2010:103]にもみられるように、これまで行われてきた多数の議論の全体を確認することは困難である。さらに個々の論点における定説・異説がどの程度存在し、それぞれ何を論拠として展開してきたのか、その現状の到達点がどこにあるのかも容易には把握できない。

筆者はこのような混迷した状況には、明治時代以来およそ140年間にわたって発信・蓄積されてきた情報がまったく整理されていないという問題が介在していると考える。とくにエゾオオカミについては研究成果の集約・整理を試みた事例はこれまでに存在しない。ニホンオオカミについては吉川[2004]や中村[2010]など、全体を概観したうえで問題点や今後の課題を整理した例があるが、その際に参照した先行研究の範囲設定や条件が不明確であり、妥当性に疑問が残る。

これまでに明らかにされている事実や研究成果が把握できず、継続して仮説の検証や結論の更新をかさねていくことが不可能な状況にあっては研究の全体的な進展は見込めない。今後の

¹ 本州産のニホンオオカミが独立種 (*Canis hodophilax*) か独立亜種 (*Canis lupus hodophilax*) かをめぐる議論については、現在にいたるまで結論は出ていない。現状ではハイイロオオカミの亜種 (*C. l. hodophilax*) とみなす見解が主流ではあるが、立証はされていない。2012年にはDNA解析の結果「ニホンオオカミが、大陸に生息するタイリクオオカミやアメリカ大陸のハイイロオオカミとは離れた存在であり、孤立化した集団である」[石黒 2012:229]ことが示されており、さらに2014年には歯帯の形態的相違の検証によりニホンオオカミを独立種 (*C. hodophilax*) に分類するのが妥当であるとする見解も示されている[中村 2014:24]。

ためにはこれまでに蓄積されてきた情報を総合的に集約し、現在までの動向と到達点を把握する必要があると考える。本稿では、まずは日本在来の2種のオオカミのうちエゾオオカミに関する研究史を検討し、日本のオオカミに関わる今後の議論・研究の進展に資することを目指すこととする。

2. 研究手法

本稿は明治時代以降に発表されたエゾオオカミに関する文献上の記述内容を分析・考察の対象とする。エゾオオカミに関わる文献を可能な限り集約するため、対象資料の収集に際してはオンラインの検索サービスおよびデータベースを利用した情報の抽出と図書館を中心とした文献渉猟を行った。

具体的な方法としては、まず「国立国会図書館蔵書検索・申込システム (NDL-OPAC)」, 「Webcat Plus」, 「CiNii Articles」, 「KAKEN」を利用して情報と資料の所在確認を試みた²。各サービスにおいて「オオカミ」・「狼」, 「ヤマイヌ」・「山犬」・「豺」, 「大口真神」, 「御犬」など、オオカミをあらわす主要な和名³を用いて検索を行い、書誌情報を抽出した。

続けて、抽出した情報に基づき、国立国会図書館、札幌市中央図書館、奈良県立図書情報館、北海道立図書館、北海道大学附属図書館、和歌山県立図書館において実際に文献の内容確認と収集を行った。ただし、入手が困難な一部の資料については、「国立国会図書館デジタルコレクション」および「近代デジタルライブラリー」、海外の文献については電子図書館 Biodiversity Heritage Library を用いて閲覧した。さらに、入手した文献の内容を確認し、情報・意見の典拠として記載される資料についても必要に応じて確認・収集を行った。文献資料の抽出・収集は2012 (平成24) 年から開始し、現在まで継続して行っている。

研究史の検討に際して必要となるのは日本のオオカミに関する知見の提示や考察・議論を行った文献資料であり、これまでに確認できているものは書籍・論文・記事あわせて841件である。このうちエゾオオカミについて言及がみられたのは213件であった。本稿ではエゾオオカミの研究史の検討にあたって、これら213件の文献を対象とする。本文中でもれなく言及することはできないが、該当する文献はすべて文末の文献リストに掲載した。

² 国立情報学研究所から提供される Webcat Plus, CiNii, KAKEN の利用について、2012 年の文献調査開始時には学術コンテンツ・ポータル「GeNii」(<http://ge.nii.ac.jp/>) を利用していた。しかし、2014 年 3 月に同サービスの提供が終了した [国立情報学研究所 GeNii 担当 2014] ため、以降は個々のサービスのみの利用に切り換えを行った。

³ 検索ワードとするオオカミの主要な和名の抽出にあたって、菱川晶子「オオカミ：名称についての一考察」[2003] および中村一恵「江戸中期・諸国産物帳に記載されたイヌ属動物の名称」[2005] を参照した。

3. エゾオオカミに関する研究動向の概要

本節では、エゾオオカミに関するこれまでの研究動向を概観する。以下では明治時代から現在までの約140年におよぶ動向を確認・展開するにあたって、便宜上全体を3つの期間に区切ることとする。本節第1項ではエゾオオカミが新亜種として記載された1930年代(1868～1940年)までの動向を述べた。続く1940年代から1980年代(1941～1990年)までを第2項、日本国内へのオオカミ再導入に関わる議論が開始された1990年代以降(1991～2015年現在まで)の動向を第3項としてまとめた。

3-1. 第I期：1930年代以前における研究動向

明治時代初期の北海道において、エゾオオカミに関する具体的かつまとまった情報は、開拓使による報告書類の中にみられる。明治時代中期以前にはエゾオオカミとニホンオオカミとを区別する意識は存在していなかったと考えられる。1884(明治17)年、開拓使が北海道内の自然・人文的事象を地誌としてまとめた『北海道志』には、「形犬ニ似テ甚タ大ナリ毛色多ク淡茶褐ニシテ黒毛ヲ雜ヘ老者ハ灰色ニ変シ甚タ家畜ヲ害ス」[開拓使 1884:387] 動物が「豺」として紹介されている。ここではオオカミと混同される可能性がある「狗」および「狐」は別に項を設けて記述されているため、この「豺」は北海道産のエゾオオカミであると判断できる。しかし、1885(明治18)年に発行された『開拓使事業報告第三編』などでは「狼」と「豺」の両方を用いている。

これらの報告に先行して、1875(明治8)年に文部省博物局の田中芳男によって刊行された図鑑『動物訓蒙』に、日本のオオカミは「ヤマイヌ(豺)」として掲載されている。この「ヤマイヌ」に、ニホンオオカミだけでなくエゾオオカミが含まれるのかは言及されていない。

一方、明治時代末になると、エゾオオカミの呼称は「狼」に限定され、本州以南のオオカミである「豺(山犬)」と呼び分けられるようになる。遅くとも1910(明治43)年にはエゾオオカミを指して「本州に棲む『やまいぬ』(豺)とは別種にして大陸の『おほかみ』に等し」[村田 1910:9] とする記述が確認できる。日本領内のオオカミを「狼」と「豺」の和名をもって呼び分ける必要が何故生じたのか、その経緯について明確に言及した事例は見いだせていないが、その背景のひとつには海外における分類学上の議論の影響があると考えられる。

日本のオオカミについては、1826年にシーボルトが大阪で採集した個体を、1839年にテミンクが「Jamainu (*Canis hodophylax*)」という新種として記載を行ったことを契機とし、その分類学上の位置づけをめぐる議論が日本国外で展開されていたという[平岩 1981:200]。議論の主要な論点となったのは、本州産の「日本ヤマイヌ」を既存のオオカミ(*Canis lupus*)の一亜種とするか、オオカミの中には含まれない別種のイヌ属の動物(*Canis hodophilax*)としてみとめるかという点である。議論に際しては北海道を含む日本の周辺地域のオオカミが比較対象

として取りあげられる例も少なからず存在した。確認できている限り⁴では、1877年には本州側の集団を *Canis hodophilax*、北海道側の集団を *Canis lupus* とし、両者を別種とみなして記述した事例がある [Zoological Society of London 1878: 116]。

また、1883 (明治 16) 年には「ブラキストン線」⁵の存在が提唱された。これが日本領土内に生息するオオカミを区別し、さらに北海道に生息したオオカミをサハリン、千島諸島、シベリアに共通する北方系種であるとする意識を生じさせた可能性も考えられる。1910 (明治 43) 年、八田三郎はブラキストン線を境界として著しい相違を示す動物種について論じているが、その中で本州に分布し北海道に存在しない「ヤマヌ (*Canis hodophylax*)」と、北海道に分布して本州に存在しない「オホカミ (*Canis lupus*)」に言及している [八田 1910: 43]。しかし、すでにエゾオオカミ、ニホンオオカミともに絶滅年を過ぎており、どのような論拠をもって両者を別種として位置づけたのかは疑問が残る⁶。

1930年代になると、日本国内におけるエゾオオカミの位置づけはさらに変化した。1931 (昭和 6) 年、岸田久吉は札幌産のオオカミの剥製 2 体の計測値と毛色に基づき、北海道産オオカミを「Yesso wolf (*Canis lupus hattai*)」として記載した [Kishida 1931: 72-75]。エゾオオカミは大陸産のオオカミに含まれない「独立亜種」として位置づけられたことになる。

さらに 1935 (昭和 10) 年には、イギリスの動物学者 Pocock もまた、北海道産オオカミを新たな独立亜種として記載した。Pocock は、大英博物館が所蔵する産地・採集地不明の頭骨 1 個についてその特徴を分析し、新亜種の学名を *Canis lupus rex*⁷ とした [Pocock 1935: 658]。

これらの記載は、限られた判断材料のみを利用して提唱された亜種であることを理由に強い批判も受けているが [阿部 1936: 642-643]、1930 年代以降、エゾオオカミは独立亜種として周辺地域のオオカミとは区別可能な存在として位置づけられていくこととなる。

1933 (昭和 8) 年に犬飼哲夫が発表した論文「北海道産狼とその滅亡経路」は、発表から 80 年以上が経過した現在でもエゾオオカミに関するもっとも重要な論考である。エゾオオカミに

⁴ 原著中の記述を確認できていないが、Leopold von Schrenck によって 1860 年に発表された *Reisen und Forschungen im Amur-Lande* において、「*Canis hodophylax* を *Canis lupus* L. なるヨーロッパ、シベリヤ、沿海州に生息する狼の同種異名なりと考へ、やはり北海道に棲む狼は *Canis lupus* L. であるとした」 [犬飼 1933b: 1093] とする指摘がある。

⁵ 1883 (明治 16) 年にトーマス・ブラキストンが P. プライヤーとの共著論文として発表した論文において津軽海峡を挟んで北海道と本州の動物相の際を報告し、その成果に基づき地震学者 J. ミルンが命名した生物の分布境界線。

⁶ 北海道産の陸棲哺乳類は北方系種と南方系種が混合しており、ブラキストン線にまたがって北海道と本州に共通して分布する種も存在する [増田 1999: 326]。

⁷ “rex” はラテン語で「王」を意味する。現在は学名規則の先取権によって発表年が早い *Canis lupus hattai* が採用される。

関わる研究・議論の際には必ず参照され、研究史においてひとつの画期をなす論考⁸ともいえる。犬飼は北海道のオオカミはすでに絶滅したとする前提に立ち、その絶滅にいたる経緯において「人文が如何に野生動物に反照したか」[犬飼 1933b:1091]を検討した。なかでも「近代文化の影響を受けて、一挙にして原始時代から文化時代に変遷した」[犬飼 1933b:1091]とする歴史認識に基づき、長く平和な共存関係を保ってきたアイヌ民族とオオカミとの関係性を急激に変化させた要因として近代化を位置づけている。明治維新後に北海道にもたらされた人文・社会的な急激な変動が人とオオカミの関係性に影響を与え、オオカミにとって致命的な変化を引き起こしたとする理解は、現在にいたるまで広く受容されている。「北海道産狼とその滅亡経路」では、生物学を内包する自然科学だけではなく人文・社会科学の分野にまたがる視点をもった総合的な議論と知見の提示がなされている。当時は北海道に入植した人々によってオオカミが絶滅に追い込まれたことが明確に意識されており、人の手によって滅亡に追い込まれるまでの社会的な背景と経緯が、生物としてのエゾオオカミを論じる際の前提とされた。

1930年代以前の議論では、著者による注意喚起が行われている点が特徴的である。八田三郎はエゾオオカミとシベリア地域のオオカミの類似性に言及する中で「別に頭骨を探しているが、残念な事には、一向手に入らぬ。いづれ其の内に集つて来るだらうと思つて居るが、それまでは、上述の事は断言が出来ぬのである」[八田 1913:n.p.]と明確に断りをいれている。犬飼哲夫もまた、エゾオオカミに関する議論に取り組む上で、典拠となる資料の少なさを前提としている。これらの議論は今後の情報や資料の拡充があることを前提とした仮説の提示であったと考えられる。

3-2. 第Ⅱ期：1940年代から1980年代の動向

1940年代以降は日本国内の2種のオオカミの絶滅が広く認識⁹されるようになった。それと同時に、日本国内からオオカミが絶滅していることを前提として過去の歴史や実態の解明に取り組むか、オオカミの絶滅を認めずに生残を前提として議論に取り組むか、議論や情報発信の際の姿勢が大きく二分された。エゾオオカミに関わる動向としては後者の傾向がみられる。北海道外の集団が生残している可能性が提示され、広く受容されたのである。

⁸ 犬飼 [1933b] に続いて北海道のオオカミを主題のひとつとし、人文・社会・自然科学にまたがる総合的な記述と問い直しを行った例は、ウォーカーによる2009(平成21)年の『絶滅した日本のオオカミ：その生態と歴史学』までまたなければならない。

⁹ ニホンオオカミの絶滅をめぐるのは現在でも疑問視、生残の可能性を提唱する声もある。志村[2005]は1946(昭和21)年に平岩米吉がニホンオオカミの生残説を否定したことを絶滅の「宣言」であったと述べる。また、平岩はその後1974(昭和49)年にも「ニホンオオカミはもういない：その残存説六十六年の記録」と題した記事を発表し、『狼：その生態と歴史』[1981]でも30頁を「残存説」の検証に割いている。

1945（昭和20）年、Harperは*Extinct and vanishing mammals of the Old World*においてエゾオオカミが生残する可能性を示した。著作中では過去のエゾオオカミに関する論考・記述を概観したうえで、サハリンとクリル諸島における生残の可能性が指摘されている [Harper 1945: 214]。明確な生残の証拠等を示したわけではないが、今泉[1960]などの動物学者によって日本国内に広く紹介され、以後およそ半世紀にわたってエゾオオカミは北海道以外の地域で生残しているのではないかとする意見の論拠と位置づけられていく。

1946（昭和21）年、更科源蔵は「狼興亡史」を著した。「狼興亡史」自体は先行する犬飼の著作からの影響が明確にみとれる内容だが、それ以降1976（昭和51）年の『コタン生物記Ⅱ』にいたるまで、更科はおおよそ30年にわたってアイヌ民族とエゾオオカミとのかかわりに関する精力的な情報発信を行った。現在、一般的知見として認められているアイヌ民族とエゾオオカミの関係性については、おおむね更科がまとめた情報といえる。更科は、過去アイヌ民族はエゾオオカミと平和裡に共存していたことを繰り返し述べてきた。とくにアイヌにとってオオカミは狩猟対象ではなく、互いに敬遠しあっていたことを強調する。また十勝地方で用いられていた「ユッコイキ・カムイ（シカを狩る・神）」というアイヌ語名称に注目して「鹿を獲って満腹になると、人間を呼んで残りの肉をさずけてくれる」[更科・更科 1976: 289] 存在であると論じ、オオカミは優れた狩りの能力を有するという特徴によって神格化され、価値を見出されていたと位置づけた。

1969（昭和44）年、今泉吉典はニホンオオカミが大陸のオオカミの亜種ではなく「未知の種」である可能性を提唱する一方で、エゾオオカミの「独立亜種」としての位置づけを疑問視した。1930年代にエゾオオカミが新亜種として記載された際に指摘された問題点と同様に、わずかな標本資料の外部形態のみからオオカミの亜種を区別することは不可能であると論じている。

エゾオオカミの形態的な特徴については、1984（昭和59）年にも議論の対象とされている。小原巖はエゾオオカミの標本資料の中ではもっとも小型になる静内産オオカミの頭骨を対象とした計測を実施し、その数値をもって北海道のオオカミの変異の大きさを改めて指摘している [小原 1984: 2]。

日本国内では1970年代ごろから自然環境問題に対する関心が高まり、公害問題への対応に端を発した環境政策など行政的な展開がみられるとされる [武内・奥田 2014: 1]。また、明治時代以来減少していた野生動物の増加や分布域の拡大による問題も取り沙汰されるようになり、自然や野生動物との共存・共生の実現を目指すうえでの問題が意識されるようになっていく。1974（昭和49）年、阿部永は「北海道に於ける哺乳類とその保護」において、オオカミが絶滅した影響をキタキツネが受けている可能性を指摘した。エゾオオカミが絶滅したことによって北海道に生息する野生動物間のバランスが保てずにいる可能性を示唆する例であるといえる。

戦後の混乱期を過ぎると、明治時代以来の急速な開発や近代化、西欧文化の受容が進む中で失われた日本の「伝統」的な事象に対する価値を見直そうとする動向¹⁰が生じた。絶滅した日本

のオオカミに対して向けられる意識もその影響を免れなかったと考えられる。1979(昭和54)年、俵浩三はエゾオオカミ絶滅について、明治維新を皮切りとして国外から流入してきた人々とその文化に責任の所在を求める議論を行った。ここでは北海道におけるオオカミの絶滅は、「お雇い外国人」を通して持ち込まれた「人間が自然を支配し、人間に都合のよい自然はこれを育て利用するが、都合の悪い自然は仮借なく切り捨ててゆく、という当時の西欧的合理精神」[俵 1979(1987):10]によって引き起こされたと論じられている。

エゾオオカミが絶滅した背景に、お雇い外国人、西欧から持ち込まれた産業や技術、さらには直接的にオオカミを害獣視する外来の思想や動物観の影響があったとする解釈は現在では広く受容され支持されている。しかし、北海道の開拓に関わったのが和人とアイヌ民族のみであればエゾオオカミを殺し尽くすような事態は起こり得なかっただろうとする考察は、1960年代以前に刊行された文献中にはみられない。こうした言説は、「西洋化」や「近代化」が肯定的なイメージのみではとらえられなくなると同時に生じた新たな動向を反映したものであると考える。

3-3. 第Ⅲ期：1990年代以降

1993年に日本オオカミ協会が設立され、日本国内への積極的なオオカミ再導入¹¹の提言・議論が開始されたことは日本のオオカミをめぐる動向において非常に大きな画期をなしている。日本人にとってのオオカミは「再導入」という発想を得たことで、「過去の絶滅動物」から「日本国内に再び復活しうる野生動物」へと位置づけを改めた。

北海道におけるオオカミ再導入の検討は、道東の知床国立公園を中心とした議論が行われてきた。とくに2005(平成17)年に知床国立公園が世界自然遺産に登録されたことを契機とし、2005年から2006(平成18)年にかけて知床博物館および知床財団を中心としてオオカミ再導入をめぐる議論が精力的に行われている[米田 2006, 亀山・仲村・宇野ほか 2005]。2005年(平成17)年7月、第9回国際哺乳類学会議では、知床国立公園における野生動物管理を主眼に置いたシンポジウム「知床とイエローストーン：代表的な国立公園における哺乳類管理の比較」

¹⁰ 石井清輝は「高度成長が生み出した弊害に対して、『日本人の伝統的なふるさと』を対置するレトリックであった。『西洋』に向けての『近代化』をひた走った結果の環境破壊や管理社会化は、失われた『日本人』や『伝統』へとその眼をむけさせ、多様な欲望が交錯する地点で『日本人の原風景』を結晶させた(略)高度成長の過程では否定された『遅れた』農村が、この時間軸を前提としたまま、肯定すべき『伝統』という評価にすりかわったのである」と論じる[石井 2007:152]

¹¹ 再導入とは「絶滅または絶滅のおそれにある種が過去に分布し、かつ現在は絶滅している生息地に、この種を再び定着させようとする事」[日本野生動物医学会 2007:25]であり、欧州ではすでに自然再生事業における重要な取り組みとして既に数十年にわたる取り組んできた歴史を有する[羽山 2006:109]。

が開催された。この中でオオカミの再導入は主要な議題のひとつと位置付けられており、日米双方の研究者による検討が行われているが、最終的には「現実的に再導入を実行できる体制は残念ながら我が国には存在していない」[山中・梶 2006：176] とする結論に落ち着いた。

オオカミ再導入の検討と並ぶ近年の成果のひとつに、1990 年代以降に日本国内のオオカミの DNA 解析が大きく進展したことがあげられる。エゾオオカミの遺伝的系統が明らかにされたのは 2003（平成 15）年の第 135 回日本獣医学会学術集会においてであった。石黒直隆・堀内基広による一般口演「絶滅した日本のオオカミの遺伝的特徴と系統解析」講演要旨をみると、エゾオオカミの模式標本 2 体のミトコンドリア DNA の塩基配列が同じであること、系統解析した結果としてエゾオオカミは大陸系のオオカミに分類され、カナダ・ユーコン地方のオオカミとも塩基配列が一致することが報告されている[第 135 回日本獣医学会学術集会事務局 2003：16]。エゾオオカミは本州以南のニホンオオカミとは遺伝的に区別され、北米、そしてユーラシア大陸側の亜種と同じ遺伝的系統に属する集団であったとする知見はすでに広く普及しつつある。従来は現存する標本の数が限られるために保留となっていたエゾオオカミの分類学上の位置づけが科学的に検証可能な手法によって改めて定められたといえよう。

また、日本列島内へのオオカミ再導入の検討が進むにつれ、日本のオオカミに対する社会的な関心も高まった。新たな研究への着手・進展がみられ、その成果が博物館における展示などを通して社会に還元されるという例も複数確認できる。北海道開拓記念館（現北海道博物館）において 2001 年にテーマ展「開拓使とエゾオオカミ」[山田ほか 2001] が開催されたのも、そうした流れのひとつと位置づけることができるだろう。明治初期の北海道における野生生物と人間の関係について、オオカミに焦点を当てて考える[山田 2002：67] ことを目的とした内容の企画展は、開催に到るまでに集約された資料・情報の規模、そして従来の知見に対する分析と見直しの姿勢は以降の議論に大きな影響を与えている。

2009（平成 21）年、ブレット・ウォーカーは『絶滅した日本のオオカミ：その生態と歴史学』において、エゾオオカミとニホンオオカミを区別せずに「日本のオオカミ」としてまとめ、両者に関する情報をほぼ均等に用いてオオカミをめぐる日本の歴史を論じた。明治時代の北海道で展開したオオカミをめぐる事象は、日本の中では「内国植民地」における特異な事例としてあつかわれがちであったのに対し、本州以南と北海道のオオカミをめぐる状況を連続したものとしてとらえようとした試みは新しい。ウォーカーは、明治時代の北海道で展開されたのは人とオオカミの間の「種間闘争」であったとし、その様相をオオカミの側の視点をふくめて考察した。人の側だけではなく「オオカミの側」にどのような事態が起きていたのかを現代的な知見を参照しながら推測し、オオカミの事情を「代弁」しながら実態を把握しようとする試みは、今後の議論の進めかたへの影響力をもつと考える。

4. 各論点における議論の到達点と問題

本節ではエゾオオカミに関する個々の論点と議論の到達点を整理する。第1項では「生物学的情報」について、第2項では「人とオオカミの関わり」、第3項では「絶滅にいたる経緯の検討」、第4項では「再導入をめぐる議論」についてまとめた。各項においては関連する個々のトピックごとに考察を行うこととする。

4-1. 生物学的情報

分布と生息地

エゾオオカミの過去の分布域については、北海道を中心にサハリン、南千島の択捉島・国後島とされている。南千島の2島については、近年日本の生物調査団によりオオカミが生残していないことが確かめられた [Sato *et al.* 2011]。エゾオオカミの分布域の北限について、現在ではサハリンとされているが、過去には北千島の幌筈島および占守島に過去に生息していた個体群はエゾオオカミなのではないかとする説 [犬飼 1932 など] も存在した¹²。岸田久吉は、幌筈島で採集されたオオカミの毛皮1枚を函館で見たとも記している [岸田 1960: 290]。サハリンでは2004(平成16)年、ロシアの生物調査団によりオオカミの絶滅が報じられている [Newell 2004]。ただし、サハリンでは、島内北部で1955年にオオカミの捕殺が行われた記録と、当該個体の剥製が残されている [Sakhalin Regional Museum (作成年不明)]。また、1999(平成11)年、2007(平成19)年にもオオカミが捕獲されている。2007年の事例については日本国内で「エゾオオカミなのではないか」と議論を呼んだが、海峡を渡ってサハリンに移動してきた大陸側のオオカミであることが確認された [井上 2008: 179]。サハリンでは毎年冬期になると海峡の氷結によりユーラシア大陸と陸続きになるためオオカミの往来が可能であるという。エゾオオカミの分布域を考える際には大陸との行き来が可能な環境を有するサハリンのオオカミをどのように位置づけるか歴史的な情報も合わせて検討しなければならない。

北海道内の分布と生息数

北海道内におけるオオカミの分布については「全域」とする説と「地域的な偏りがあった」とする説とが存在する。オオカミの生息数に地域的な偏りがあったとする知見は、犬飼 [1933b] がオオカミの獲殺場所から過去の分布を復元しようとした事例を参照していると考えられる。また、宗谷、留萌、網走などの道北地方にはシカが少なく、オオカミもまた少なかった可能性

¹² 1943(昭和18)年、犬飼は北千島に生息するオオカミを「エゾオオカミ」とみなした報告を行った。北千島の占守島・幌筈島に生息したオオカミはカムチャッカ半島から海をわたって到来したものと考えられてきたが、北海道産のエゾオオカミと同種であるとみなそうとした犬飼の議論は、太平洋戦争当時の占守島・幌筈島が対米防衛の最前線であったことと無関係ではないと考える。

を指摘する事例もある [朝日・米田 1983:110]。

過去の北海道内におけるオオカミの生息数については、犬飼[1933b]による 2,000~3,000 頭説がこれまで支持されてきた。しかし、犬飼がどのような知見に基づき推定したのかは不明である。2006 (平成 18) 年、「知床に再導入したオオカミを管理できるか」[2006]において、北海道および知床半島におけるオオカミの収容力について推測されている。ここでは現代のオオカミにとっての生息不適地および生息密度、人口密度、採食量のレビューを踏まえたうえで、全北海道では面積の 80%にあたる 62,384 km²におけるオオカミの収容力は 624 頭、群れにすると 41~42 程度が収容可能であると述べている。現状では米田によるこの試算や結果に基づく議論については評価や問題提起は確認できておらず、今後の専門的な議論を待ちたい。

分類学上の位置づけ

かつて北海道、サハリン、南千島に分布したエゾオオカミの分類学上の位置づけについては、①本州以南のニホンオオカミと区別の必要がない集団、②ニホンオオカミとは区別されるハイイロオオカミの基亜種 (*C. l. lupus*) に内包可能な集団、③独立亜種 (*C. l. hattai*) 集団であるとする説がそれぞれ検討されてきた。①については、石黒 [2012] による研究結果をもって否定されたといえる。

エゾオオカミという亜種の分布域に関する議論は、生物学的な見地に基づくものだけでなく、背景として日本の領土の境界と関連づけるために利用された可能性も残る。とくに南千島のオオカミについては、近代初期の具体的な生息の記録がまとめられていないため、存在が不明確な印象を受けかねない。実際はかなり早い段階で択捉島・国後島から絶滅しているのではないかとする意見が近年提示されている [Sato, *et. al.*, 2011]。南千島にオオカミが生息していたとすればいつごろまで見られていたのか、近年まで生残していたのであれば何故絶滅したのかという点について情報の収集と検討を進めていく必要がある。

剥製・標本資料

エゾオオカミであると認められている標本資料は、剥製 4 体 (いずれも北海道大学植物園所蔵)、頭骨 7 個 (北海道大学植物園所蔵資料 4 個、新ひだか町アイヌ民俗資料館所蔵資料 1 個、大英博物館所蔵資料 1 個、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館 1 個) が存在する。

現在、北海道大学植物園・博物館 (旧札幌農学校所属博物館、旧北海道大学農学部博物館) の常時展示となっている 2 体の剥製は模式標本であり、札幌農学校で教鞭をとっていた J. C. カターが製作保存に関わったと推測されている [島倉 1968:n.d.]。

北海道大学はさらに 2 体、通常は展示されていない剥製が存在する。札幌農学校博物館時代 の原簿には、この 2 頭の剥製は北海道産東京飼育のオス・メスとあるという [山田 2002:85]。館外での企画展等に貸し出されることの多い小型の剥製は D. P. ペンハローが製作したと推測

されている [門崎 1996: 248]。この剥製は、理由は不明ながら八田三郎によって「不完全」と記述されたことがある [八田 1913: n.d.]。

残る1体は、阿部余四男が「色調」および「四肢や耳や体の釣り合い」 [阿部 1923: 385] である点から、そして斎藤弘吉が「吻細長」 [斎藤 1938: 31] という点から朝鮮半島産のオオカミであると同定した剥製である。

これらの剥製や標本は、主として博物館における展示品として利用されてきた。絶滅した動物の容姿を伝える貴重な資料であるため、形態的な特徴を分析するための計測や DNA 解析のための骨粉の採取は例外的な利用法といえる。

近年では北海道犬の仔の剥製がエゾオオカミの剥製ではないかと報道され話題となった例もあるが [北海道新聞 2003, 朝日新聞 2004], 現存するエゾオオカミの剥製・標本はニホンオオカミ¹³と比較しても非常に少なく, 「剥製」と「標本」の用語の混同によって数の上での混乱もみられた。

毛色

岸田久吉は、エゾオオカミを新亜種として記載する際、剥製の計測値にくわえて毛色に言及し、剥製の外部形態に基づく亜種の記載は有効であると論じた [Kishida 1931: 74]。しかし、エゾオオカミの毛色は多様であったともされ [今泉 1960: 163], 固有とみなすことができるほど明確な特徴を有していたのかは疑問が残る。

エゾオオカミの毛色に言及している例を概観すると, 「色は灰色狼と称せられるもので夏は灰色で冬は灰白色に変る」 [犬飼 1933 a: 1], 「背は茶褐色, 腹面は淡褐色」 [直良 1941: 127] として, 灰色あるいは茶色に大別することはできる。

アイヌ民族の口承文芸の中でも, エゾオオカミは白と関連づけられているという [本田 2004: 44]。地域によっては狼神が身につけるオオカミの皮が「金」であると言及した口承文芸も存在する [梅木 2014: 44]。口承文芸における言及という特殊な事例ではあるが, 狼神が身につける衣装の色としてあらわれる「白」や「金」は, アイヌにとって実際のオオカミの毛色と結びつけられる象徴的な色であったととらえることができる。

ニホンオオカミを描いた絵画の中に存在する黒毛のオオカミについて, 北海道側ではこれまで言及がない。本州以南の集団と比較するとエゾオオカミは明るい毛色であった可能性を指摘できるかもしれない¹⁴。

¹³ ニホンオオカミの剥製は6体確認 [宮本 2001], 頭骨は記録のうえでは72個体 [中村 2004: 92] が確認されている。

¹⁴ かつてエゾオオカミの写生画が存在した。1961 (昭和36) 年に沼田荷舟によって描かれた2枚の淡

大きさ

エゾオオカミは大型のオオカミとして知られる。ユーラシア大陸に生息するオオカミ (*C. l. lupus* あるいは *C. l. chanco*¹⁵⁾) に近縁であるとみなされたのも体の大きさによるところが大きい。1998 (平成 10) 年、中村一恵は「オオカミの分布と地理的変遷」において、北海道のエゾオオカミがニホンオオカミほど小型化しなかった理由について、「北海道が高緯度に位置し、その環境が東シベリアから極東南部にかけての環境条件に類似した亜寒帯的な気候下にあったこと」と「餌動物の体の大きさが本州のものより大きいこと」をあげている [中村 1998: 57-58]。

エゾオオカミの体重については、エドウィン・ダンが完全に成熟したオオカミの体重は 70~80 ポンドと言及した例が知られている [ダン 1930: 6]。これは新冠周辺の個体群のものと推測される。記述の通り、平均的な体重が 30 kg 台だったのであれば、現存する亜種の中では中型のオオカミに属するといえよう [桑原 2014: 14]。体高については、80 cm [平岩 1946: 1] や 1 m [直良 1941: 127] と記述する例もみられるが、実測したものではない。剥製の計測値として、北海道大学が所蔵する模式標本の外部測定値が岸田 [1931] に記載されている。しかし、頭胴、尾、後足、耳、眼間部、前吻部、後吻部、橈部、脛部の測定値のみで体高は記載されていない。また、エゾオオカミの模式標本は 1993 (平成 5) 年に内部から頭骨が取り出されており [門崎 1996: 247]、およそ 60 年前の岸田による計測値から変動している可能性がある。

【表 1】は 2010 年 8 月に筆者が行った模式標本 2 体の計測結果である。すでに作成から 100 年以上が経過し、頭骨取り出しなどの改作を経ている剥製のためこれらの数値は概測の結果とみなすべきであるが、1879 (明治 12) 年に現在の札幌市白石区内で捕殺されたオスの剥製の体高はおおよそ 64 cm であった。ニホンオオカミの体高の平均値¹⁶⁾ との差は 10 cm 未満となる。

ニホンオオカミとエゾオオカミの差異については、体の大きさの差が強く意識されてきた。とくに世界的にみても小型であったとされるニホンオオカミとの比較において、エゾオオカミは必ずその大きさが強調されるが、従来考えられてきたほどの明確な差が存在していたとはいえないのではないだろうか。

今泉 [1949] はエゾオオカミを世界で「最大」の亜種、ニホンオオカミを「最小」の亜種と称した。この表現は多くの一般の記述に影響を与え、現在でもエゾオオカミの解説などで散見される。ただし、今泉は「POCOCK 氏は rex 即ち王と名付けたが、王者の名に背かぬ偉大な亜種で、本土のオウカミ中最小の亜種なのと顕著な対照をなしている」 [今泉 1949: 151] とも述

彩画は、1875 (明治 8) 年に開拓使で飼育されていたとされるエゾオオカミの生時と死後それぞれの様子を描いたものとされる。実物は失われているが、平岩米吉『狼：その生態と歴史』にモノクロの全体写真が、直良信夫『日本産狼の研究』に全体から一部を切り取ったカラー写真が掲載され、両者を合わせて様子を確認することができる。

¹⁵⁾ 時代を下ると *Canis lupus chanco* に酷似するとされることもある [今泉 1995: 50]。

¹⁶⁾ ニホンオオカミの体高の平均値は 56~58 cm [平岩 1992: 210]。

べており、日本固有の亜種それぞれに対する「価値」の付与を試みる意味があったとも考えられる。

エゾオオカミが一概に大型のオオカミであったとは限らないとする指摘は過去にもされてきた[小原 1984: 3]。体の一部分の計測値から全身の大きさをどの程度推測可能なのか¹⁷ という疑問も残るが、エゾオオカミの生体の体高・体長、体重等の正確な計測値はほとんど残っておらず、信憑性のある数値をもって体格を断定することは困難である。

【表1】エゾオオカミ 模式標本計測値

資料番号	HUNHM9889	HUNHM9890
産地 性別	1879 (明治12) 年8月 白石産 ♂	1881 (明治14) 年6月 豊平産 ♀
全長	1,884 mm	1,767 mm
頭胴長	1,346 mm	1,390 mm
尾長	538 mm	377 mm
体高	646 mm	—
耳長	106 mm	103 mm

※計測日：2010年8月9日

生態

エゾオオカミの生態に関しては、過去の記録から推測するほかに、「習性などはハイイロオオカミに類似する」[今泉 1995] ことを前提とし、産仔数や群れの構成等をすべて現生のハイイロオオカミのものを当てはめて述べる傾向がある。

食性については、肉食・魚食性であり、沿岸地域では討ち上げられる魚やクジラ、内陸部では当時おびただしく生息したシカを獲物としていたことを主に旧記を用いて解説する例が多い。

エゾオオカミの食性については、現在増加の一途をたどるエゾシカの個体数を抑制し、農林業における被害を抑えることができるか否かをめぐる再導入に関する議論と深く繋がっている。実際にオオカミの存在がシカの個体数をどの程度抑制しうるのか疑問視している例も多く、今後エゾオオカミとエゾシカとの関わりについては、議論に供する具体例の把握につとめる必要がある。

¹⁷ たとえばヒグマに関しては、米田・阿部 [1976] は地域におけるサケ・マスなど魚類の供給量がヒグマの頭骨の大きさと相関性を有する可能性に言及している [米田・阿部 1976: 274]。

4-2. 人とオオカミの関わり

アイヌ民族とエゾオオカミ

北海道におけるアイヌ民族とオオカミの関係性は、長く平和な関係が続けられてきたと理解される。口承文芸の内容を対象とした議論の中でもアイヌにとってオオカミは格が高く、人間の味方となってくれる存在として位置づけられ[中川 1997: 51-52], 肯定的かつ親和的な印象が強調されている。人とオオカミは相互に敬遠しあい、距離を保つことによって共存していたとする記述の多くは更科源蔵の著作を典拠としている。しかし、更科自身の論考をみると、紹介される個々の事例がどのような記述や情報に由来するのか不明確な部分も多く、今後の検証の余地は大きいと考える。

アイヌ民族とオオカミの関係性が常に友好的で平和裡のものだったかという点には疑問も残る。バチェラー [1925] は、アイヌ民族がときにオオカミを狩猟対象とし、あるいは罠での混獲が起き得た点に触れており、アイヌ側にオオカミの狩猟を禁じる認識は存在しなかった可能性をうかがわせる。河野常吉資料（北海道立図書館北方資料室所蔵）には、開拓期の北海道でアイヌがオオカミを嫌い、手当金の支給を受けるために捕獲していたことに言及した事例も存在する [山田 2002: 80]。

また、アイヌ文化におけるオオカミの表象をみると、その地域差が考慮されず、個別の事例が北海道アイヌ全体が共有していたものとして一般化されやすい点は注意を要する。限られた事例をもって全体を論じている可能性があるとするれば、あらためられる必要がある。

和人とエゾオオカミ

過去の北海道においてエゾオオカミと和人がどのような場面で関わりを築いていたのかについては不明確な部分が多い。なかには近世における記述が少ないこと、オオカミは生息していないと明言する史料の記述を踏まえて、過去の松前ではオオカミがいることを知らずに過ごせるほど被害を受ける機会も少なかった可能性を考察する例もある[俵 1979: 103]。北海道における和人とエゾオオカミのかかわりについては、明治維新以降に始まったととらえられる傾向にあり、前近代についてはほとんど議論されていないのが現状といえよう。

北海道では記録上オオカミによる人身被害は確認されていない。そのため、基本的には家畜に対する被害のみを理由として「害獣」として位置づけられていたとみなすのが一般的である。しかし、近世や明治初期の状況を論じる中で、当時の人々がオオカミの存在に対して戦慄や恐怖など負の情動を覚えていたとする記述も存在する[犬飼 1933b, 1975 など]。危害を加えた事例は確認できずとも、危うい状況が生じていた可能性をうかがわせる。

エゾオオカミはこれまで、多くの牧場でウマを中心とした家畜被害をもたらす害獣であると解釈されてきた。しかし、この被害の実態について多数の事例が知られているわけではない。新冠牧場を含む道南地方における狼害は深く掘り下げられているが、反対にそれ以外の地域に

における具体的な被害の記述は検討されていない。今後は近代以降に時期を限定せず、また全道を対象として、和人がオオカミとどのようにかかわっていたのか実態を描き出し、全体を把握していく必要がある。

4-3. 絶滅にいたる経緯の検討

絶滅要因

1890年代後半にはすでに北海道のオオカミは絶滅状態にあったとされる。1910(明治43)年には「殆んど絶滅せんとし」[八田 1910: 47]、「開拓の進歩と共に漸く数を減じ、目下殆見る事難し」[村田 1910: 9]と評される状況にあった。1913(大正2)年、八田三郎が現存する剝製3体を紹介する中で「今や全北海道内に、狼はたつた三疋の外は全く其影を潜めた」と述べたことは、北海道産オオカミの絶滅宣言に等しい。1936(昭和11)年になると「今時北海道狼が居つたら大変な学界の驚異である」[齊藤 1936: 35]と述べられるほど、北海道におけるオオカミの絶滅が動物学者間において広く認められていた。

エゾオオカミの絶滅について「北海道のオオカミによる被害が深刻となったのは、シカが激減したことと無関係ではない」[俵 2008: 73]とする指摘が見られるように、大雪の影響、主要な獲物であるエゾシカの減少、伝染病、生息地の減少など複合的な要因を挙げる研究者も存在する。1914(大正3)年、北海道庁警部である小松梧樓によって編まれた『北海道衛生誌』にはオオカミの絶滅に狂犬病が影響した可能性について言及がみられる。小松は狂犬病の流行とその様相についてまとめる中で「本道の狼の一時に絶滅せしは同族間に本病の流行せし為ならんと称するものもあるも確たる事蹟伝はらず」[小松編 1914: 562]と考察している。最近では、田口[2015]によって、明治時代に入って北海道に侵入した野生動物の感染症を絶滅の要因とし、具体的な病名があげられている。ただし、どちらも罹患したオオカミが実在したかについての具体的な事例は見出していない。

エゾオオカミの絶滅についての具体的な議論は、やはり人の手による狩猟圧と深く関連付けられる。その絶滅経緯については、「有害鳥獣獲殺」制度がもっとも強く影響したことが明治時代から途切れることなく意識されてきた。「有害鳥獣獲殺」制度とその経過については盛んな研究の蓄積がみられる。なかでも山田[2002, 2011]、ウォーカー[2009]によって、経過や個々の事例までがほぼ網羅されている。今後は山田およびウォーカーが課題として挙げた点に取り組み補完する作業が主体となるだろう。

一方、北海道における人とオオカミの関わりを述べるうえで非常に重要な論点でありながら、具体的にはどのような資料を用いているのかが全く不明な要素も存在する。犬飼は、函館付近の文献に残る記述として文化年中(1804年～1818年)に「人家接近に熊狼出沒する時は期月を定め証書を取り鉄砲を貸与した」[犬飼 1933a: 4]事例を紹介している。これは北海道(松前地)において、江戸時代から銃を用いたオオカミの打ち払いが行われていた可能性を示す記述

といえる。犬飼は典拠となる文献に言及しないため、今後は北海道史や前近代の文献資料を網羅していく必要があるが、北海道における人とオオカミの関係性を明らかにするうえで重要な論点である。銃を用いたオオカミの駆除がどの時期から存在していたのか、明治時代の「有害鳥獣獲殺」制度に影響を与えなかったのか、検討する必要がある。

従来の議論や研究においては、オオカミの絶滅が起きた経緯と理由の解明に取り組もうとしながらも、実際の駆除・捕獲に従事した主体が誰だったのかという点についてはなおざりにされがちであった。暗黙のうちに開拓使の役人や入植した和人による成果とする見方が主体だったようだが、ときおり「屯田兵」や「アイヌ猟師」と言及する例もあらわれる。それぞれ明確な論拠が存在するのか事例の洗い出しが必要であろう。

絶滅年と生残説

エゾオオカミの絶滅年については、犬飼による「明治廿九年に函館の毛皮商松下氏が狼皮を輸出品として若干取扱ったことがあると云ふ記録が残された狼の最後の記録である」[1933a：7]とする1896年説が主流となっていた。しかし、開拓使文書の精査により、1896～1903年までの間に北海道産オオカミの皮を加工・販売したという以上のことはいい切れないとする指摘がなされた[山田 2002：86]。

本州以南のニホンオオカミの事例では、各地で生残説が途切れることなく報じられているため、剥製標本という確実な資料を伴う1905（明治38）年の奈良県鷺家口における記録を「最後の記録」として位置づけている[平岩 1981]。その認識に従うと、エゾオオカミであることが確実な剥製は、1881年（明治14）年に現在の札幌市豊平区で捕殺された個体の剥製ということになる。

北海道のオオカミにも、絶滅年以降の生残説がないわけではない。直良[1941]は1901（明治34）、1902（明治35）年頃にはまだオオカミが目撃されていたことを紹介している。さらに桑原[1993]には、1921（大正10）年のビタランケ（現在の広尾町ビタタヌンケ）での遭遇が、阿部・矢島[1988]には1936（昭和11）年の稚内クサンル（現在の稚内市緑町）での目撃例が記載されている。しかし、これらの情報がエゾオオカミの生残を検討するために大きく取り上げられた形跡はなく、絶滅年の再検討などの議論を呼ぶには至らなかったと考えられる。

4-4. 再導入をめぐる議論

北海道へのオオカミ再導入は、主にエゾシカの増加と農林業被害を抑制する効果を期待されて議論の俎上にあげられる。2004年～2006年にかけて策定された「知床半島エゾシカ保護管理計画」においても、オオカミ再導入への言及がみられた。ここでは、検討期間内に導入の可否の決定ができないこと、オオカミによるエゾシカの個体数抑止における効果が未知であること、導入実験が知床半島内に収まらないことを理由として採択しなかったとしている[梶 2007：

20]。オオカミによるシカの個体数抑止効果については、海外の事例に基づき効果を確実視する論者と、日本国内の歴史上の記述や事例に基づき効果を疑問視・否定する論者とが対立しあう状況にある。

北海道におけるオオカミの再導入に関わる議論は知床国立公園を中心として展開してきた。最近では大雪山へ放獣への言及 [丸山・ビートたけし 2014: 286] もみられる。

これまで取り組まれた中でももっとも規模が大きく、影響力を有すると考えられる議論の事例として、2005年に開催された第9回国際哺乳類学会におけるシンポジウム「知床とイエローストーン国立公園¹⁸の比較」[齊藤編 2005: 196]がある。このシンポジウムでは知床国立公園へのオオカミの再導入もひとつのテーマとして取りあげられており、その成果は『世界自然遺産 知床とイエローストーン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』[2006]として刊行された。ここでは実際に国立公園内へのオオカミの再導入を実施したイエローストーン国立公園におけるオオカミの位置づけや生態、社会からの反応、管理手法に関する情報を踏まえたうえで議論が行われ、その結果として日米双方の研究者が「現時点では知床国立公園にオオカミを再導入できる段階にない」と論じている [マッカロー 2006: 170, 山中・梶 2006: 175-176]。また、米田 [2006] も、知床へのオオカミ再導入の課題として①オオカミの収容力、②導入後のオオカミの管理、③社会的受容の3点をあげ、このうち②導入後のオオカミの管理、および③社会的受容について困難であると論じている。なかでも社会的受容について「導入後は家畜被害が予想され低い確率であっても人身被害も起きる可能性があるが、他の野生動物による被害補償との整合性から直接被害補償システムの構築には困難が予想される」[米田 2006: 6]としている。いずれの例も、北海道におけるオオカミの再導入において解決されるべき課題として管理体制の改善や、技術・システムの不備不足など人間社会側の問題をあげている。オオカミの再導入をめぐる一般的な議論の中心は、導入されたオオカミがもたらすであろう人身被害、あるいはペットを含む家畜被害であり、それらをいかに防ぐかという、オオカミの生態をめぐる問題が重視されている印象を受ける。しかし、北海道における議論では、そうした被害や再導入されたオオカミをめぐるトラブルを想定した上で、再導入の実現に必要な要因は人間社会側の技術やシステム上の問題解決であると位置づけているといえる。

日本国内へのオオカミ再導入を推奨しようとする側では、オオカミの生態面に関わる課題が強く意識されており、野生動物としてのオオカミをいかに日本人に受容させるかが問題視されている。一方、日本国内へのオオカミの再導入に懐疑・否定的、あるいは現状では不可能とみ

¹⁸ イエローストーン国立公園 (Yellowstone National Park) は、1872年に世界で初めて制定された国立公園である [マッカロー 2006: 13]。1995年にオオカミの再導入を実施し、2000年までにオオカミ再導入による期待以上の成果を得、問題点は予測以下に収まり、「予定より早く、予算より安く」目標の達成に成功した [スミスほか 2006: 73-74]。

なす側では、オオカミが導入される地域に成り立つ人間社会とオオカミとの間に発生する可能性がある種々の軋轢をいかに解消するかが意識されており、そのための制度や技術に関する議論・知見が求められているといえる。それぞれの立場において意識される問題・課題の解決は同時に進められなければならないが、現状では成立しているとはいいがたい。日本国内へのオオカミの導入に関しては、単純に賛成か反対かという2項対立に留まらない複雑さがある。特定の問題・課題の解決がかなってはいじめて検討するべきであるとする慎重な姿勢をうかがわせる事例もみられる。

北海道に暮らす人々がオオカミに対してどのようなイメージを抱いているかが不明であるとする指摘もある〔亀山 2006：89〕。「日本野生動物における再導入ガイドライン」〔2007〕に定められるとおり、日本国内における再導入事業においては、地域住民の姿勢に関して入念な調査することが求められる。地域のコミュニティに十分に理解され、受け入れられ、サポートされなければならない〔日本野生動物医学会 2007：xxvii〕という観点からも、今後も継続して再導入の検討を試みる場合は北海道におけるオオカミに対する意識調査、人々のオオカミに対する価値志向を明らかにする必要がある。

以上に見てきたように、エゾオオカミに関わる研究のうち、絶滅の経緯、そして直接的な原因を生じさせた「有害鳥獣獲殺」制度についての研究の層が厚い一方で、人との関わり、とくに和人とエゾオオカミの関わりに関する知見や検討はほとんど見られない。

この点については、絶滅という結末がすでに明らかにされているために、限られた事例のみを用いた議論・論証が行われ、資料や事例の数を増やして多面的に検討する傾向が生じなかったと推測する。今後はオオカミに関わる個別具体的な事例を体系的に収集し、分析対象となる情報量を増やすことができれば、情報の蓄積や事例の数が少ない論点についても検討の余地が生じると考える。

5. おわりに：結論と今後の課題

本稿では明治時代から現在にいたるまでのエゾオオカミに関する研究動向を概観し、論点ごとの到達点を確認した。エゾオオカミの絶滅が起きた経緯、そしてそこに介在した問題のうち、把握されているのはいまだごく一端であり、何らかの結論を導くことができている論点は限られる。

これまでに蓄積されてきたエゾオオカミに関する情報をみると、分類学上の位置づけの検討が主体となっており、それと合わせて過去の北海道で起きたオオカミの「絶滅」という事態の経緯と理由の解明が目指されていたといえる。

エゾオオカミは、分類学上は北海道、サハリン、南千島という非常に限られた地域にのみ分

布していた独立亜種であり、北海道においては在来の野生動物ということができる。しかし、そうした独立性や固有性を付与された位置づけが確定した1930年代には北海道内では絶滅したとみなされており、さらに生残の可能性が残る地域が敗戦を機として日本領外となったことは、結果としてエゾオオカミが「日本在来の野生動物」として認められ、日本国内において何らかの価値を付与される機会を失わせてきた。それは同時に「日本」にかかわる問題と野生動物としてのエゾオオカミの存在を結びつけた研究や議論の機会を限定させてきたという点においても不運であった。

北海道における人とオオカミの関わりについては、アイヌ民族とオオカミの関係性が注目され、頻繁に取り上げられてきた。一方、北海道にエゾオオカミが生息していた当時、和人とエゾオオカミとの間にどのような関係が成立していたのかはこれまでほとんど議論されていない。北海道における和人とエゾオオカミの関わりについては、本州以南の事例との比較対象としても今後の議論の余地がもっとも大きい論点であると考えられる。

現在、日本の2種のオオカミの絶滅は、明治維新を皮切りとして外部から流入してきた西欧文化がもたらした悪因悪果のひとつと位置づけられる傾向がある。文献上の記述を見るかぎり、明治時代以降しばらくのあいだは「害獣」であったエゾオオカミの駆除と絶滅は自覚的にとらえられていた。しかし、戦後になると明治維新に端を発する西欧文化の流入や急速な近代化が日本人のオオカミ観を変容させ、エゾオオカミの絶滅はそこからもたらされた悲劇であったと述べられるようになる。外部からもたらされた「近代化」とその種々の要素が日本人の本来のオオカミ観を変化させ、日本古来の「神獣」を「害獣」あるいは「悪獣」に塗り替えたとする言説には受け入れやすさがある。しかし、野生動物としてのオオカミに対して人々が向ける意識は特定の研究事例や新たな議論の影響を受けて変化しうるものである。限られた議論や事例のみに基づきながら「定説」として受容されているのであれば、過去の実態を正しく反映していない可能性も考えられる。

今後のエゾオオカミに関する研究では、既存の知見の妥当性の評価が求められると同時に、検討対象とするべき情報や事例の数を増やすことが優先的に目指されるべきである。とくに実際にオオカミの獲殺に従事した人々が、どのような意識でそこに関わっていたのかは、オオカミが絶滅した背景を明確にするためにも慎重に検討していかなければならない。

6. 謝辞

本稿の執筆において、北海道大学大学院文学研究科・北方文化論講座教授の佐々木亨先生には日ごろよりご指導を賜り、心から感謝を申し上げます。北海道大学・北方生物圏フィールド科学センターにおけるエゾオオカミの剥製・資料計測時には阿部永先生、市川秀雄氏、高谷文仁氏にご指導をいただきました。日本オオカミ協会会員の井上守氏には、日本オオカミ協会機

関誌『フォレスト・コール』第18号までの入手に際して大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。当然ながら、本稿における誤りなどはすべて筆者のみの責に帰するものです。

エゾオオカミに関する文献リスト

番号	刊行年	著者・編者	標題	掲載誌名・書名 [出版社]	巻	号	ページ	備考
1	1878 (明治11)	The Zoological Society of London.	“On a new Philippine Genus and Species of Bird”	<i>Proceedings of The Zoological Society of London</i> [London: Academic Press]	46	(1)	pp.114-120	
2	1881 (明治14)	Brauns, R.	“On Canis Hodophylax or Japanese Wolf”	<i>Chrysanthemum: a monthly magazine for Japan and the Far East</i> [Yokohama: Kelly & Co., No. 28 Main Street]	1	—	pp.66-67	
3	1884 (明治17)	開拓使編	「豺」	『北海道志』[東京：歴史図書社(1973)]	—	—	p.387	
4	1885 (明治18)	Nehring, A.	“On the wolf of Nippon”	<i>The Zoologist</i> [London: Natural History Museum Library]	—	10	pp.8-16	
5	1890 (明治23)	Mivart, St. George Jackson.	“THE COMMON WOLF. CANIS LUPUS”	<i>Dogs, jackals, wolves, and foxes: a monograph of the Canidae</i> [London: R. H. Porter]	—	—	pp.13-15	
6	1910 (明治43)	八田 三郎	「動物の分布上北海道の位置」	『動物學雜誌』[東京：日本動物学会]	—	(256)	pp.43-47	
7		村田 庄次郎	「動物標本類」	『札幌博物館案内』[札幌：維新堂]	—	—	pp.292-312	
8		八田 三郎	「北海道の狼：口絵及図版」	『動物學雜誌』[東京：日本動物学会]	—	291	口絵	
9	1913 (大正2)	Aoki, Bunichiro. (青木文一郎)	“A Hand-List of Japanese and Formosan Mammals”	<i>Annotationes Zoologicae Japonenses</i> (『日本動物学彙報』) [Tokyo: Zoological Society of Japan]	8	(2)	pp.261-353	
10	1914 (大正3)	北海道廳	「狂犬病」	『北海道衛生誌』[札幌：北海道廳]	—	—	pp.561-584	
11	1917 (大正6)	金田一 京助	「人が動物に化ける話」	『金田一京助全集』[東京：三省堂(1992)]	12	—	pp.674-677	
12	1918 (大正7)	太田 順治	「山犬と狼」	『世界動物園』[東京：自学奨励会]	—	—	pp.25-30	
13		岸田 久吉	「オホカミ」	『哺乳動物図解』[東京：日本鳥学会]	—	—	pp.233-238	
14	1925 (大正14)	内田 亨	「食肉目」	『萬有科学大系』[東京：新光社萬有科学大系]	3	—	pp.568-569	
15		バッチェラー, ジョン (John, Batchelor)	「熊及狼礼拝」	『アイヌ人とその説話』[札幌：富貴堂書房]	—	—	pp.370-371	
16	1926 (大正15)	阿部 余四男	「おほかみ」	『最近中等動物学』[東京：三省堂]	—	—	pp.10-11	
17	1927 (昭和2)	内田 清之助	「てうせんおほかみ」	『日本動物園鑑』[東京：北隆館]	—	—	p.33	
18		恵利 恵	「おほかみ」	『動物学精義 各論』[東京：目黒書店]	—	—	pp.462-463	
19	1928 (昭和3)	Kuroda, Nagamichi. (黒田 長礼)	“The mammal fauna of Sakhalin.”	<i>Journal of Mammalogy</i> [Baltimore, Md.: American Society of Mammalogists]	9	(3)	pp.222-229	
20		川内 國雄	「おほかみ」	『北海道樺太産哺乳動物』[札幌：富貴堂書房]	—	—	pp.136-137	
21	1930 (昭和5)	ダン, エドウィン (Dun, Edwin)	「馬匹改良」[孤筈生(西川吉之助)訳]	『太湖』[八幡町(滋賀縣)：太湖社]	—	(55)	p.6	執筆年月日不明
22		ダン, エドウィン (Dun, Edwin)	「狼とバツタ」[孤筈生(西川吉之助)訳]	『太湖』[八幡町(滋賀縣)：太湖社]	—	(56)	p.6	執筆年月日不明
23	1931 (昭和6)	Kishida, Kyukichi. (岸田 久吉)	“Notes on Yesso Wolf”	『蘭山會機閣雜誌：LANSANIA-Journal of Arachnology and Zoology』[東京：総合科学出版協会]	—	25	pp.72-75	
24	1932 (昭和7)	犬飼 哲夫	「北海道の動物の由来とその変遷」	『北海道郷土史研究』[札幌：日本放送協会北海道支部]	—	—	pp.32-50	
25	1933 (昭和8)	犬飼 哲夫	「絶滅した北海道の狼」	『日本犬』[東京：日本犬保存会]	2	(1)	pp.1-7	
26		犬飼 哲夫	「北海道産狼とその滅亡経路」	『植物及動物』[東京：養賢堂]	1	(8)	pp.11-18	
27	1934 (昭和9)	犬飼 哲夫	「千島の動物概観」	『千島概況』[札幌：北海道庁]	—	—	pp.87-99	
28		阿部 余四男	「日本狼は現存するか」	『ケレン』[大阪：ケレン編輯室]	5	(27)	pp.20-27	
29	1935 (昭和10)	平岩 常吉	「狼と山犬の辯」	『動物文学』[東京：白日荘]	—	(6)	pp.52-53	
30		Pocock, Reginald Innes.	“The races of Canis lupus”	<i>Proceedings of the Zoological Society of London</i> [London: Academic Press]	105	3	pp.647-684	

梅木：エゾオオカミ研究史の検討

31		阿部 余四男	「日本領内の狼に就てボコック氏に與ふ」	『動物学雑誌』[東京：日本動物学会]	48	(8)	pp.8-10	
32	1936 (昭和11)	岸田 久吉	「絶滅したエゾオホカミの學名と記載」	『蘭山會機閣雜誌 LANSANIA : Journal of Arachnology and Zoology』[東京：総合科学出版協会]	—	(79)	pp.129-130	
33		齊藤 弘	「日本犬と狼の關係に就いて」	『動物文学』[東京：築地書館]	—	18	pp.33-37	
34		名取 武光	「北日本に於ける動物意匠遺物と其の分布相」	『北大博物館報告』[札幌：北海道帝国大学農学部附属博物館]	—	—	pp.1-33	
35	1937 (昭和12)	阿部 余四男	「神谷氏所蔵の山犬（日本狼）頭骨に就て」	『博物館研究』[東京：日本博物館協会]	10	(4)	pp.236-238	
36	1938 (昭和13)	齋藤 弘	「東京科学博物館倉庫内に発見せられたヤマミスの全身骨骼並にその他の同資料に就いて」	『博物館研究』[東京：日本博物館協会]	11	(4)	pp.27-31	
37	1940 (昭和15)	直良 信夫	「北海道の狼」	『動物文学』[東京：築地書館]	—	(61)	pp.80-81	
38	1941 (昭和16)	直良 信夫	「根室地方に於けるエゾオホカミ」	『日本産獣類雑誌』[東京：山岡書店]	—	—	pp.126-128	
39	1943 (昭和18)	犬飼 哲夫	「北海道・樺太・千島に於ける鳥獸の分布」	『自然科学觀察と研究叢書：北海道・樺太・千島列島篇』[東京：山雅房]	—	(1)	pp.79-97	
40	1945 (昭和20)	Harper, Francis.	“Japanese Wolf; CANIS HODO-PHILAX Temminck” “Yezo Wolf; CANIS LUPUS HATTAI Kishida”	<i>Extinct and vanishing mammals of the Old World.</i> [New York: American Committee for International Wild Life Protection]	—	—	pp.213-215	
41	1946 (昭和21)	更科 源蔵	「狼興亡史」	『北方動物記』[札幌：柏葉書院]	—	—	pp.36-40	
42		平岩 米吉	「日本狼・解説」	『動物文学』[東京：白日荘]	—	99	pp.1-13	
43	1949 (昭和24)	今泉 吉典	「エゾオウカミ」	『日本哺乳動物図説』[東京：洋々書房]	—	—	pp.149-152	
44	1953 (昭和28)	知里 真志保	「niaw」	『分類アイヌ語辞典：植物編』[東京：日本常民文化研究所]	2	—	p.277	
45		北海道	「有害鳥獸の捕獲」	『北海道山林史』[札幌：北海道]	—	—	pp.586-590	
46	1955 (昭和30)	犬飼 哲夫	「北海道の動物誌」	『日本文化風土記：北海道篇』[東京：河出書房]	1	—	pp.28-41	
47	1959 (昭和34)	知里 真志保	「アイヌ語獣名集」	『北海道大學文學部紀要』[札幌：北海道大學文學部]	7	—	pp.121-150	
48		今泉 吉典	「やまいぬ（にほんおおかみ）」	『原色日本哺乳類図鑑』[東京：保育社]	—	—	p.20	
49	1960 (昭和35)	岸田 久吉	「千島群島の哺乳動物相」	『鳥獸集報』[東京：林野庁]	17	2	pp.283-306	
50		更科 源蔵	「狼興亡史他」	『日本山岳風土記：北海道の山々』[東京：宝文館]	6	—	pp.273-282	
51	1961 (昭和36)	朝日新聞社	「滅びゆく種族：エゾオオカミ」	『きたぐにの動物たち』[東京：角川書店（※）]	—	—	pp.31-33	
52		畠山 三郎太	「考古学研究メモ：縄文早期遺跡のエゾオオカミについて」	『北海道地方史研究』[札幌：北海道地方史研究会]	—	(38)	pp.48-49	
53	1964 (昭和39)	金田一 京助		『アイヌ叙事詩ユーカラ集』[岩波文庫]	4	—		
54		齊藤 弘吉	「現代北海道狼」	『日本の犬と狼』[東京：雪華社]	—	—	p.225	
55	1965 (昭和40)	更科 源蔵・ 谷本 一之	——	『アイヌ伝統音楽』[東京：日本放送出版協会]	—	—	—	
56		直良 信夫	「北海道のエゾオオカミ」	『日本産狼の研究』[東京：校倉書房]	—	—	pp.209-212	
57	1966 [昭和41]	犬飼 哲夫	「鹿と狼とトナカイと黒テンとリスと」	『暮らしの手帖』[東京：暮らしの手帖社]	—	(87)	pp.174-181	
58	1968 [昭和43]	島倉 亨次郎	「エゾオオカミ」	『北大時報』[札幌：北海道大学事務局]	—	(171)	表紙写真説明	
59		今泉 吉典	ナゾに包まれるニホンオオカミ 新しい視野でこの“珍獣”の追及を	『科学朝日』[東京：朝日新聞社]	29	7	pp.104-108	
60	1969 [昭和44]	小原 秀雄	「日本野生哺乳動物記2：オオカミ」	『自然』[東京：中央公論社]	24	(11)	pp.76-81	
61		小原 秀雄	「日本野生哺乳動物記3：オオカミその2」	『自然』[東京：中央公論社]	24	(12)	pp.80-86	
62	1970 (昭和45)	早川 昇	「魔よけの小膚帯」	『民俗民芸双書：アイヌの民俗』[東京：岩崎美術社]	54	—	pp.71-76	
63	1971 (昭和46)	犬飼 哲夫	「鹿と狼」	『わが動物記』[東京：暮らしの手帖社]	—	—	pp.107-121	

64		小原 秀雄	「オオカミ」	『日本野生動物記』[東京：中央公論社]	—	—	pp.15-47	
65	1972 (昭和47)	河野 本道	「Aynuの祖先起源伝承における人間と人間以外の動物との婚話」	『市立旭川郷土博物館研究報告』[旭川：旭川郷土博物館]	—	(8)	pp.7-12	
66		北海道開拓記念館	「エゾオオカミ」	『北海道の動物：哺乳類・爬虫類・両生類（資料解説シリーズ）』[札幌：北海道開拓記念館]	—	(2)	p.19	
67	1974 (昭和49)	阿部 永	「北海道における哺乳類とその保護」	『哺乳類科学』[東京：日本哺乳類学会]	—	(28・29)	pp.4-18	
68		犬飼 哲夫	「オオセカムイはクマより上位」	『北方動物誌』[札幌：北苑社]	—	—	pp.180-26	
69	1975 (昭和50)	関 秀志	「明治初期～中期における北海道の博物館：札幌を中心に」	『北海道開拓記念館研究年報』[札幌：北海道開拓記念館]	—	(4)	pp.47-64	
70	1976 (昭和51)	更科 源蔵・ 更科 光	「オオカミ（やまいぬ）」	『コタン生物記Ⅱ：野獣・海獣・魚族篇』[東京：法政大学出版局]	—	—	pp.289-293	
71		朝日 稔	「オオカミ」	『日本の哺乳動物』[東京：玉川大学出版部]	—	—	pp.126-135	
72	1977 (昭和52)	更科 源蔵・ 更科 光	「タンチョウヅル」	『コタン生物記Ⅲ：野鳥・水鳥・昆虫篇』[東京：法政大学出版局]	—	—	pp.655-659	
73		末岡 外美夫	「ホルケウノチウ：乙女座α」	『旭川叢書12：アイヌの星』[旭川：旭川振興公社]	12	—	pp.119-129	
74		俵 浩三	「エゾオオカミ」	『北海道の自然保護：その歴史と思想（増補版）』[札幌：北海道大学図書刊行会（1987）]	—	—	pp.102-111	
75		日本地誌研究所・ 青野 壽郎・ 尾留川 正平	「ヒグマ・オオカミ」	『日本地誌：北海道』[東京：二宮書店]	2	—	pp.71-72	
76		長谷川 善和	「日本産食肉獣の概要」	『哺乳類科学』[京都：日本哺乳類学会]	19	(2)	pp.23-28	
77		犬飼 哲夫	「北海道の開拓と自然」	『月刊文化財/文化庁文化財部監修』[東京：第一法規]	—	(209)	pp.4-10	
78		更科 源蔵	「狼の下る山」	『アイヌ伝説集（更科源蔵アイヌ関係著作集）』[札幌：みやま書房]	1	—	p.196	
79		更科 源蔵		『アイヌ民話集（更科源蔵アイヌ関係著作集）』[札幌：みやま書房]	2	—		
80	1981 [昭和56]	更科 源蔵	「狩りをする神」	『アイヌの神話（更科源蔵アイヌ関係著作集）』[札幌：みやま書房]	3	—	pp.191-194	
81		芳賀 良一	「エゾオオカミ」	『北海道大百科事典：上』[札幌：北海道新聞社]	—	—	pp.211-212	
82		平岩 米吉	「エゾ狼の絶滅」	『狼：その生態と歴史』[東京：築地書館]	—	—	pp.238-243	
83		犬飼 哲夫	「北海道の動物今昔」	『動物と自然』[東京：ニュー・サイエンス社]	12	(2)	pp.2-3	
84	1982 (昭和57)	更科 源蔵	「犬と狼」	『アイヌの民俗：上（更科源蔵アイヌ関係著作集）』[札幌：みやま書房]	4	—	pp.80-83	
85		更科 源蔵	「狩りをする大神」	『アイヌ文学の謎（更科源蔵アイヌ関係著作集）』みやま書房。	7	—	pp.80-84	
86		朝日 稔・ 米田 政明	「開拓と絶滅：エゾオオカミへの挽歌」	『滅びゆく動物たち』[東京：東海大学出版会]	—	—		
87	1983 (昭和58)	井上 泰男・ 石城 謙吉	「生態系の変貌」	『北海道の資源：その開発と保存』[札幌：北海道大学図書刊行会]	—	—	pp.27-38	
88		小原 巖	「絶滅した日本のオオカミ」	『動物と自然』[東京：ニュー・サイエンス社]	14	(11)	pp.2-6	
89	1984 (昭和59)	西本 豊弘	「北海道の縄文・続縄文文化の狩猟と漁撈：動物異存体の分析を中心として」	『国立歴史民俗博物館研究報告』[佐倉：国立歴史民俗博物館]	—	(4)	pp.1-15	
90		藤村 久和	——	『アイヌ，神々と生きる人々』[東京：福武書店]	—	—	—	
91		藤原 英司	「北加伊エゾシカ物語 26：オオカミの復讐」	『朝日ジャーナル』[東京：朝日新聞社]	27	(29)	pp.55-59	
92	1985 (昭和60)	藤原 英司	「北加伊エゾシカ物語 27：雪，雪，雪」	『朝日ジャーナル』[東京：朝日新聞社]	27	(30)	pp.53-57	
93	1987 (昭和62)	坂本 正行	「神々とアイヌ」	『北の神々と先住民族』[札幌：マービス]	—	—	pp.29-38	

梅木：エゾオオカミ研究史の検討

94	1988 (昭和63)	小原 秀雄	「まだ早い『狼の挽歌』（ニッポン『幻の動物』記）」	『科学朝日』[東京：朝日新聞社]	46	(6)	pp.26-29	
95		鈴木 延夫	「エゾオオカミ絶滅の謎」	『アラスカの雪原にて：動物一家オオカミに逢う』[東京：日本放送出版協会]	—	—	pp.9-35	
96	1989 (平成元)	木村 盛武	「何故滅んだオオカミ」	『野生の事件簿：北の動物たち』[札幌：北海道新聞社]	—	—	pp.209-220	
97		小山 宏	——	『ニホンオオカミ：日本特産・絶滅種』[渋川：渋川・北群馬郷土館]	—	—	—	
98	1990 (平成2)	佐々木利和	「犬は先祖なりや：アイヌの創世説話と和夷同祖論」	『北からの日本史 第2集』[東京：三省堂]	—	—	pp.189-226	
99		関 秀志・ 中田 幹雄・ 千代 肇	「明治期における北海道の博物館(1)」	『北海道開拓記念館調査報告』[札幌：北海道開拓記念館]	—	(29)	pp.113-139	
100		蓮池 悦子	「アイヌの『犬・狼祖説話』とユーカラ（佐々木報告へのコメント）」	『北からの日本史：第2集』[東京：三省堂]	—	—	pp.226-130	
101	1991 (平成3)	関 秀志	「明治期における北海道の博物館(2)」	『北海道開拓記念館調査報告』[札幌：北海道開拓記念館]	—	(30)	pp.91-118	
102	1992 (平成4)	門崎 允昭	「積丹半島の動物相：哺乳類・爬虫類・両生類」	『北海道開拓記念館研究報告：積丹半島の自然と歴史 自然編』[札幌：北海道開拓記念館]	—	(12)	pp.35-62	
103	1993 (平成5)	朝日新聞アイヌ民族取材班	「アイヌ ネノ アン アイヌ」	『コタンに生きる』[東京：岩波書店]	—	—	—	
104		桑原 康彰	「幻の北海道オオカミを見た：吉田権三郎」	『日高の動物記』[東京：南雲堂]	—	—	pp.141-142	
105	1994 (平成6)	今泉 忠明	「東京国立博物館蔵『博物館獣譜面より』」	『彩色 江戸博物学集成』[東京：平凡社]	—	—	p.269	
106		村元 直人	「捕殺により絶滅したエゾオオカミ」	『蝦夷地の外人ナチュラリストたち』[函館：幻洋社]	—	—	pp.163-164	
107		山田 孝子	「霊魂とカムイ」	『アイヌの世界観』[東京：講談社]	—	—	pp.60-112	
108	1995 (平成7)	今泉 忠明	「ニホンオオカミ（一名ヤマメヌ、ホンドオオカミ） エゾオオカミ」	『絶滅野生動物の事典』[東京：東京堂出版]	—	—	pp.35-51	
109		梶 光一	「シカの爆発的增加：北海道の事例」	『哺乳類科学』[京都：日本哺乳類学会]	35	(1)	pp.35-42	
110		竹中 修	——	「絶滅したヤマメヌのDNAに基づく系統解析」[京都大学]	—	—	—	
111		常田 邦彦	「シカ個体群の制限要因としてのオオカミ」	『哺乳類科学』35(1) [京都：日本哺乳類学会]	35	(1)	pp.45-48	
112		山中 正実	「コメント：オオカミ不在の北海道のヒグマ」	『哺乳類科学』35(1) [京都：日本哺乳類学会]	35	(1)	pp.65-70	
113	1996 (平成8)	門崎 允昭	「鹿の興亡と狼の絶滅」	『Dr.カドサキの実用鑑定野性動物痕跡学事典』[札幌：北海道出版企画センター]	—	—	pp.246-248	
114		豊原 照司	「ウンメムケにおける穿孔位置について」	『環オホーツク：第3回環オホーツク海文化のつどい報告書』[紋別：北の文化シンポジウム実行委員会]	—	(3)	pp.63-69	
115		中村 一恵	「オオカミ・シカ・カラス：エゾオオカミの復元に向けて」	『フォレスト・コール』[所沢：日本オオカミ協会]	—	(3)	pp.2-5	
116		長谷部 一弘	「在サントペテルブルグのアイヌ民族資料」	『地域史研究：はこだて』[函館：函館市史編纂室]	—	(23)	pp.1-18	
117		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第1回：四年前、私はオオカミに遭った！？」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(25)	pp.113-120	
118		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第2回：オオカミの遠吠えが、ある男の一生を変えた」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(26)	pp.113-120	
119		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第3回：DNA 鑑定のとある朗報」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(27)	pp.115-122	
120		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第4回：最後のニホンオオカミを見た、最後の日本人」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(28)	pp.115-122	
121		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第5回：世界で六体目のニホンオオカミの標本」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(29)	pp.113-120	

122	1996 (平成8)	山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第6回：イギリスにある標本データ」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(30)	pp.115-121	
123		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第9回：奥日光の自然崩壊」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(33)	pp.121-127	
124		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第10回：シーボルトのニホンオオカミ」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(34)	pp.105-111	
125		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第11回：京都大学のDNA鑑定の今」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(35)	pp.125-131	
126		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第12回：最初のニホンオオカミをめぐって」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(36)	pp.125-131	
127	1997 (平成9)	小谷 凱宣	「欧米アイヌ・コレクションの比較研究」	『平成6～8年度 文部科学省科学研究費補助(国際学術研究・国際学術調査)研究成果報告書』[名古屋：名古屋大学大学院人間情報学研究科]	—	—	pp.63-72	
128		中川 裕	「カムイの世界」	『アイヌの物語世界』[東京：平凡社]	—	—	pp.18-76	
129		日本哺乳類学会	オオカミ：ニホンオオカミ エゾオオカミ	『レッドデータ：日本の哺乳類』[東京：文一書房]	—	—	p.96	
130		増田 隆一・茂原 信夫	「日本産食肉目の種名の検討」	『哺乳類科学』[京都：日本哺乳類学会]	37	(1)	pp.87-93	
131		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第13回：誰がニホンオオカミを命名したのか」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(37)	pp.123-129	
132		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第14回：ヤマヌとは？」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(38)	pp.125-131	
133		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第16回：今も続く一七〇年前の混乱」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(40)	pp.121-127	
134		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 第17回：オオカミはいた。そしてヤマヌも」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(41)	pp.121-127	
135		山根 一眞	「山根一眞の動物事件簿一狼 最終回：私たちはなぜ、ニホンオオカミの生存を信じるのか」	『シンラ』[東京：新潮社]	—	(43)	pp.121-127	
136		今泉 吉典	「タイリクオオカミの直線クライン」	『哺乳動物進化論』[東京：ニュートンプレス]	—	—	pp.142-160	
137	1998 (平成10)	SPb (サンクトペテルブルグ) -アイヌプロジェクト調査団	LIST	『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』[東京：草風館]	—	—	p.189	
138		中村 一恵	「オオカミの分布と地理的変異」	『特別展図録オオカミとその仲間たち：イヌ科動物の世界』[小田原：神奈川県立生命の星・地球博物館]	—	—	pp.49-53	
139		本多 勝一	「エゾオオカミ」	『きたぐにの動物たち』[東京：朝日新聞社]	—	—	pp.65-67	
140	1999 (平成11)	浅見 由ミ・上北 尚正・河西 恭子ほか	「哺乳類の毛皮標本からのDNA抽出ならびに機能遺伝子の回収に関する研究」	『日本畜産学会報』[東京：日本畜産学会]	70	(10)	pp.351-362	
141		池田 貴夫	「ヒグマをとりまく猛獣群の民族学的位置づけ——北東アジアにおけるツキノワグマ、オオカミ、トラとの比較」	『北海道開拓記念館研究紀要』[東京：北海道開拓記念館]	—	(27)	pp.95-112	
142		門崎 允昭・関 秀志	「蝦夷地における動物相の文献学的研究」	『北海道開拓記念館調査報告』[札幌：北海道開拓記念館]	—	(38)	pp.93-112	
143		増田 隆一	「ブラキストン線(津軽海峡)に関する食肉類の生物地理と遺伝的特徴」	『哺乳類科学』[東京：日本哺乳類学会]	39	(2)	pp.351-358	
144	2000 (平成12)	中川 裕	「アイヌ口承文芸テキスト集1：白沢ナベ口述 狼から逃れた娘」	『千葉大学ユーラシア言語文化論集』[千葉：千葉大学]	—	(3)	pp.52-66	
145	2001 (平成13)	沖野 慎二	「北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(下)」	『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』[札幌：北海道立アイヌ民族文化研究センター]	—	(7)	pp.1-19	
146		中川 裕	「アイヌ口承文芸テキスト集2：白沢ナベ口述 主人を助けられなかった犬」	『千葉大学ユーラシア言語文化論集』[千葉：千葉大学]	—	(4)	pp.77-94	
147		藤田 一咲	「エゾオオカミ：開拓時代の彼方に消えた/ニホンオオカミ：かつて「神」とよばれた」	『絶滅危惧種を見に行く：滅びゆく日本の動植物たち』[東京：マガジンハウス]	—	—	pp.9-11	
148		三浦 泰之	「ウィーン万国博覧会と開拓使・北海道」	『北海道開拓記念館研究紀要』[札幌：北海道開拓記念館]	—	(29)	pp.177-205	

梅木：エゾオオカミ研究史の検討

149	2001 (平成13)	山田 伸一・ 堀繁 久・ 水島 未記	——	『豆本 30 北海道開拓記念館第 130 回 テーマ展：開拓史とエゾオオカミ』[札幌： 北海道開拓記念館]	—	—	—	
150	2002 (平成14)	環境省自然環境局野生 生物課編	「ニホンオオカミ/エゾオオカミ」	『改訂・日本の絶滅のおそれのある野生 生物：レッドデータブック 1 哺乳類』 [東京：自然環境センター]	—	—	pp.23-25	
151		山田 伸一	「オオカミ・ヒグマ・カラス：明治期 北海道における「有害鳥獣駆殺手当」 をめぐって」	『北海道開拓記念館調査報告』[札幌： 北海道開拓記念館]	—	(41)	pp.67-92	
152	2003 (平成15)	川合 禎次	「日本の狼」	『昆虫少年の博物誌：水棲昆虫とともに』 [東京：東海大学出版]	—	—	pp.48-72	
153	2004 (平成16)	本田 優子	「アイヌ口承文芸にあらわれる衣服 について」	『北海道立アイヌ民族研究文化セン ター研究紀要』[札幌：北海道アイヌ民 族文化研究センター]	—	(10)	pp.33-67	
154		松谷みよ子	「狼・山犬考」	『現代民話考：狼・山犬 猫』[東京： 筑摩書房]	10	—	pp.18-209	
155		吉家 世洋・ 丸山 直樹	「エゾオオカミは絶滅していない」	『日本の森にオオカミの群れを放て』 [東京：ビイング・ネット・プレス]	—	—	pp.75-81	
156		Newell, Josh.	“Ecology”	<i>The Russian Far East: A Reference Guide for Conservation and Develop- ment</i> [California: Daniel & Daniel Pub]	—	—	pp.384-388	On Sakhalin at least five m a m m a l species have disappeared during the past millen- nium ... and gray wolf (Canis lupus)
157		石城 謙吉	「100 平方メートル運動の森・トラ スト」と絶滅種の復元」	『知床博物館研究報告』[斜里町：斜里 町立知床博物館]	—	(26)	pp.25-27	
158	2005 (平成17)	石城 謙吉・ 中川 元	「肉食獣再導入問題をめぐって」	『知床博物館研究報告』[斜里町：斜里 町立知床博物館]	—	(26)	pp.29-36	
159		加藤 峰夫	「絶滅種の人為的導入に関する法制 度および社会的側面の課題：オオカ ミとカワウソを例として」	『知床博物館研究報告』[斜里町：斜里 町立知床博物館]	—	(26)	pp.47-54	
160		亀山 明子・ 仲村 昇・ 宇野 裕之ほか	「オオカミ (Canis lupus) の保護管理 及び再導入事例について」	『知床博物館研究報告』[斜里町：斜里 町立知床博物館]	—	(26)	pp.7-46	
161		川村 正一	「エゾオオカミ」	『アイヌ語の動植物探集』[網走：文泉 堂]	—	—	pp.22-23	
162		南部 成美	「知床にオオカミが戻れば観光船が 儲かる」って本当？」	『フォレスト・コール』[日本オオカミ 協会]	—	(11)	pp.26-27	
163		丸山 直樹・ 吉田 光宏	「獣害防止へオオカミ再導入急げ： 日本オオカミ協会 丸山直樹会長 (東京農工大学農学部教授) に聞く」	『農林経済』[東京：時事通信社]	—	(9681)	pp.2-6	
164		青柳 信克	「オオカミ」	『みゆじあむ MUSEUM』[旭川：旭 川市博物館]	—	(23)	p.3	
165		加藤 由香・ 山中 正実	「合同シンポジウム専門家会議コメ ント要約」 デール・R・マッカーロー、 梶 光一、山中 正実編	『世界自然遺産 知床とイエロース トーン：野生をめぐる二つの国立公園 の物語』[斜里町：知床財団]	—	—	pp.160-164	
166	2006 (平成18)	亀山 明子	「北海道におけるエゾオオカミ絶滅 の歴史と知床国立公園におけるオオ カミ再導入の可能性について」	デール・R・マッカーロー、梶 光一、山 中 正実編 『世界自然遺産 知床とイ エローストーン：野生をめぐる二つの 国立公園の物語』pp.87-89, 知床財団.	—	—	pp.160-164	
167		黒岩 聡奈	「明治初期における博覧会から見た アイヌの生活」	『アジア文化史研究』[仙台：東北学院 大学大学院文学研究科アジア文化史専 攻]	—	(6)	pp.39-66	
168		橘 宏	「レポート：剥製標本のエゾオオカ ミを尋ねて」	『柴犬』[大仙：天然記念物柴犬研究会]	—	(94)	pp.13-15	
169		中川 裕	「アイヌ口承文芸テキスト集 7：白 沢ナベ口述 狼が人間の母親に虐待 された」	『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 [千葉：千葉大学]	—	(9)	pp.219-256	

170	2006 (平成18)	本川 雅治・ 下稲葉さやか・ 鈴木 聡	「日本産哺乳類の最近の分類体系：阿部 (2005) と Wilson and Reeder (2005) の比較」	『哺乳類科学』[京都：日本哺乳類学会]	46	(2)	pp.181-191	
171		米田 政明	「知床に再導入したオオカミを管理できるか」	『知床博物館研究報告』[斜里町：斜里町立知床博物館]	—	(27)	pp.1-8	
172	2007 (平成19)	石黒 直隆	「古代 DNA 分析からみた日本在来犬の系統とニホンオオカミとの関係」	『生物の科学：遺伝』[東京：北隆館]	61	(4)	pp.70-76	
173		今泉 忠明	「エゾオオカミのこと」	『野生イヌの百科』[東京：データハウス]	—	—	pp.17-18	
174		梶 光一	「知床世界自然遺産地域のエゾシカ保護管理計画：管理すべきか、遷移に委ねるべきか」	『生物の科学：遺伝』[東京：北隆館]	61	(5)	pp.18-21	
175		丸山 直樹	「復活オオカミによって家畜の被害は起るのか？：北海道の牧場訪問から」	『フォレスト・コール』[日本オオカミ協会]	—	(12)	pp.2-16	
176		丸山 直樹・ 須田 知樹・ 小金澤 正昭	——	『オオカミを放つ：森・動物・人のよい関係を求めて』[東京：白水社]	—	—	—	
177		井上 剛	「JWA 自由集会『オオカミを放つ』報告」	『フォレスト・コール』[日本オオカミ協会]	—	(13)	pp.7-17	
178	2008 (平成20)	加藤 克	「北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について：歴史的背景を中心に」	『北大植物園研究紀要』[札幌：北海道大学]	—	(8)	pp.35-91	
179		田辺 安一	「エゾオオカミ」	『お雇い農業教師 エドウィン・ダン：ヒツジとエゾオオカミ』[札幌：北海道出版企画センター]	—	—	—	
180		俵 浩三	「オオカミを殺し尽くすため」	『北海道・緑の環境史』[札幌：北海道大学出版会]	—	—	pp.71-75	
181		丸山 直樹	「道東，エゾシカの異常繁殖に悲鳴」	『フォレスト・コール』[：日本オオカミ協会]	—	(13)	pp.2-3	
182		ウォーカー，ブレット・L [Walker, Brett. L.]	——	『絶滅した日本のオオカミ：その生態と歴史学』[札幌：北海道大学出版会]	—	—	—	
183	2009 (平成21)	門崎 充昭	「オオカミ <i>Canis lupus</i> 」	『野生動物痕跡学辞典』，[札幌：北海道出版企画センター]	—	—	pp.392-393	
184		末岡外美夫	「ホロケウ・ノチウ」	『人間逢のみた星座と伝承』[札幌：末岡由喜江]	—	—	pp.280-292	
185		北海道観光振興機構アイヌ文化部会ワーキンググループ	「エゾオオカミ：ホロケウ，ホロケウカムイ」	『ガイド教本・アイヌ民族編〈動物編〉』北海道観光振興機構。	—	—	pp.6-7	
186		Ishiguro, Naotaka. Inoshima, Yasuo. Shigehara, Nobuo.	“Mitochondrial DNA Analysis of the Japanese Wolf (<i>Canis lupus hodophilax</i> Temminck, 1839) and Comparison with Representative Wolf and Domestic Dog Haplotypes”	<i>Zoological Society of Japan</i> [東京：日本動物学会]	26	(11)	pp.765-770	
187	2010 (平成22)	Ishiguro, Naotaka. Inoshima, Yasuo. Shigehara, Nobuo.	“Osteological and Genetic Analysis of the Extinct Ezo Wolf (<i>Canis lupus hattai</i>) from Hokkaido Island, Japan”	<i>Zoological Society of Japan</i> [東京：日本動物学会]	27	(4)	pp.320-324	
188		煎本 孝	「熊祭りの地域的差異」	『アイヌの熊祭り』[東京：雄山閣]	—	—	pp.83-157	
189		小林 茂	「人類史とオオカミ，狼習俗と信仰についての断章：直良信夫先生とその仕事を偲んで」	『秩父 山の民俗考古』[東京：言叢社]	—	—	pp.255-486	
190		中村 生雄	「オオカミをとおして見る人と自然」	『日本人の宗教と動物観：殺生と肉食』[東京：吉川弘文館]	—	—	pp.101-141	
191		井上 剛・ 南部 成美・ 朝倉 裕ほか	「2010 年度大会自由集会記録 管理主義から生態系主義へ：カワウソ・オオカミの復活」	『哺乳類科学』[京都：哺乳類科学編集部]	51	(1)	pp.147-151	
192	2011 (平成23)	柴村 紀代	「赤羽末吉『けちんぼおおかみ』論：アイヌ民話を絵本にすること」	『藤女子大学紀要：第2部』[札幌：藤女子大学]	—	(48)	pp.177-182	
193		山田 伸一	「オオカミ・ヒグマ・カラスに関する『有害鳥獣撲殺』手当」	『近代北海道とアイヌ民族：狩猟規制と土地問題』[札幌：北海道大学出版会]	—	—	pp.115-160	

梅木：エゾオオカミ研究史の検討

194	2011 (平成23)	Sato, Yoshikazu. Nakamura, Hidetsugu. Ishifune, Yuka. Ohtaishi, Noriyuki.	“Short Communication; The white-colored brown bears of the Southern Kurils”	<i>Ursus</i> [United State: The International Association for Bear Research and Management]	22	(1)	pp.84-90	
195		渡辺 一史	「タンチョウと私のねじれ」	『北の無人駅から』[札幌：北海道新聞社]	—	—	pp.93-190	
196	2012 (平成24)	石黒 直隆	「絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統」	『日本獣医師会雑誌』[日本獣医師会]	65	(3)	pp.225-231	
197		中沢 克昭	「ブレット・ウォーカー著／浜健二訳『絶滅した日本のオオカミ：その生態と歴史学』」	『歴史評論』[東京：丹波書林]	—	(743)	pp.98-103	
198		平田 剛士	「神獣『ホロケウカムイ』が害獣にされた日：エゾオオカミ」	『名前で読み解く：日本いきもの小百科』[東京：平凡社]	—	—	pp.21-23	
199	2013 (平成25)	丸山 直樹	「伝統的信仰とオオカミの復活(上)」	『Plan B』[東京：ロゴス社]	—	(41)	pp.10-15	
200		丸山 直樹	「伝統的信仰とオオカミの復活(下)」	『Plan B』[東京：ロゴス社]	—	(42)	pp.32-37	
201		和田 一雄	「どうやって野生動物の被害を防ぐか」	『ジビエを食べれば「害獣」は減るのか：野生動物問題を解くヒント』[東京：八坂書房]	—	—	pp.15-54	
202	2014 (平成26)	朝倉 裕	「日本人とオオカミ」	『オオカミと森の教科書』[東京：雷鳥社]	—	—	pp.46-48	
203		梅木 佳代	「口承文芸にあらわれるアイヌのオオカミ観：先行研究との比較を中心に」	北海道民族学[札幌：北海道民族学会]	—	(10)	pp.38-55	
204		環境省自然環境野生生物課希少種保全推進室編	「エゾオオカミ」	『レッドデータブック 2014：日本の絶滅のおそれのある野生生物：1 哺乳類』[東京：ぎょうせい]	—	—	p.6	
205		桑原 康生	「日本人とオオカミ」	『オオカミの謎：オオカミ復活で生態系は変わる！？』[東京：誠文堂新光社]	—	—	pp.46-50	
206		堀口 翔平	「学生投稿：増加するシカの食害：解決の鍵はオオカミの導入か？」	『北方林業』[札幌：北方林業会]	—	(782)	pp.17-20	
207		丸山 直樹	——	『オオカミが日本を救う！：生態系での役割と復活の必要性』[白水社]	—	—	—	
208		丸山 直樹・ビートたけし	「達人対談：オオカミ復活で生態系を取り戻せ（オオカミの達人・丸山直樹東京農工大学名誉教授 一般社団法人日本オオカミ協会会長 vs. ビートたけし）」	『新潮 45』[東京：新潮社]	33	(5)	pp.276-287	
209		ランゲ, ユルゲン [Lange, Jurgen]	「Lost Zoo 004：Japanese Wolf ニホンオオカミ」	『どうぶつのくに』[東京：百瀬製作所]	—	(70)	pp.12-13	
210		Matsumura, Shuichi, Yasuo Inoshima, Naotaka Ishiguro.	“Reconstructing the colonization history of lost wolf lineages by the analysis of the mitochondrial genome”	<i>Molecular Phylogenetics and Evolution</i> [San Diego: Academic Press Inc Elsevier Science]	—	(80)	pp.105-112	
211		桑原 康生	「北海道では絶滅してしまったハイイロオオカミ [特集 世界から見た北海道②北米]」	『モーリー：北海道ネイチャーマガジン』[札幌：北海道新聞野生生物基金]	—	(39)	pp.18-21	
212	2015 (平成27)	田口 洋美	「列島開拓とオオカミの絶滅：富士山麓の事例から」	季刊 東北学(第3期) [東北芸術工科大学東北文化研究センター]	6	—	pp.38-60	
213		Matsubayashi, Jun. Morimoto, Junko. Otayasu, Ichiro. Mano, Tsutomu. Nakajima, Miyuki. Takahashi, Osamu. Kobayashi, Kyoko. Nakamura, Futoshi.	“Major decline in marine and terrestrial animal consumption by brown bears (<i>Ursus arctos</i>)”	<i>Scientific Reports</i> [Nature Publishing Group]	5	—	pp.1-8	

7. 参考文献一覧

和文文献

- 朝日新聞アイヌ民族取材班 1993『コタンに生きる』岩波書店.
- 朝日稔・米田政明 1983「開拓と絶滅：エゾオオカミへの挽歌」朝日稔編『滅びゆく動物たち』pp. 105-124.
- 阿部敏夫・矢島睿編 1988『北の語り』3, 北海道口承文芸研究会.
- 阿部永 1974「北海道における哺乳類とその保護」『哺乳類科学』28・29 合併号, pp.4-18.
- 阿部余四男 1923「日本石器時代の犬科動物私見」『動物学雑誌』433, pp.485-488.
- 阿部余四男 1936「日本領内の狼に就てポコック氏に與ふ」『動物学雑誌』48, pp.8-10.
- 石井清輝 2007「消費される「故郷」の誕生：戦後日本のナショナリズムとノスタルジア」『哲學』117, 125-156.
- 石黒直隆 2012「絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統」『日本獣医師会雑誌』65(3), pp.225-231.
- 犬飼哲夫 1932「北海道の動物の由来とその変遷」日本放送協会北海道支部編『北海道郷土史研究』pp. 32-50.
- 犬飼哲夫 1933「絶滅した北海道の狼」『日本犬』2(1), pp.1-7.
- 犬飼哲夫 1933「北海道産狼とその滅亡経路」『植物及動物』(1)8, pp.11-18.
- 犬飼哲夫 1934「千島の動物概観」『千島概況』pp.87-99, 北海道庁.
- 井上剛 2008「JWA 自由集会『オオカミを放つ』報告」『フォレスト・コール』13, pp.7-17.
- 今泉吉典 1969「ナゾに包まれるニホンオオカミ：新しい視野でこの“珍獣”の追及を」『科学朝日』29(7), pp.104-108.
- 今泉吉典 1949『日本哺乳動物図説』洋々書房.
- 今泉吉典 1960『原色日本哺乳類図鑑』保育社.
- 今泉忠明 1995『絶滅野生動物の事典』東京堂出版.
- ウォーカー, プレット・L [浜健二訳] 2009『絶滅した日本のオオカミ：その生態と歴史学』北海道大学出版会
- 梅木佳代 2014「口承文芸にあらわれるアイヌのオオカミ観：先行研究との比較を中心に」『北海道民族学』10, pp.38-55, 北海道民族学会.
- 大蔵省 1885『開拓使事業報告第三編』大蔵省.
- 小原巖 1984「絶滅した日本のオオカミ」『動物と自然』14(11), pp.2-6.
- 開拓使編 1884 [1973]『北海道志』歴史図書社.
- 梶光一 2007「知床世界自然遺産地域のエゾシカ保護管理計画：管理すべきか、遷移に委ねるべきか」『生物の科学：遺伝』61(5), pp.18-21.
- 門崎充昭 1996『Dr. カドサキの実用鑑定野性動物痕跡学事典』北海道出版企画センター.
- 亀山明子・仲村昇・宇野裕之ほか 2005「オオカミ (Canis lupus) の保護管理及び再導入事例について」『知床博物館研究報告』26, pp.7-46.
- 亀山明子 2006「北海道におけるエゾオオカミ絶滅の歴史と知床国立公園におけるオオカミ再導入の可能性について」マッカーロー, デール・梶光一・山中正実編『世界自然遺産 知床とイエローストーン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』pp.87-89.
- 岸田久吉 1960「千島群島の哺乳動物相」『鳥獣集報』17(2), pp.283-306.
- 桑原康彰 1993『日高の動物記』南雲堂.
- 桑原康生 2014『オオカミの謎：オオカミ復活で生態系は変わる!?』誠文堂新光社.

- 小松梧樓編 1914『北海道衛生誌』北海道庁。
- 齊藤隆編 2006「第9回国際哺乳類会議を終えて」『哺乳類科学』45(2) pp.193-212.
- 斎藤弘 1936「石器時代犬の骨格とヤマイヌ鑑別私見」『日本犬』5(4), pp.1-30.
- 齊藤弘吉 1938「東京科学博物館倉庫内に発見せられたヤマイヌの全身骨格並にその他の同資料に就いて」『博物館研究』11(4), pp.27-31.
- 更科源蔵 1946「狼興亡史」『北方動物記』柏葉書院。
- 更科源蔵・更科光 1976『コタン生物記II：野獣・海獣・魚族篇』法政大学出版局。
- 島倉亨次郎 1968「エゾオオカミ」『北大時報』171, 表紙写真説明。
- 志村真幸 2005「ニホンオオカミは『いつ』絶滅したのか?：平岩米吉と南方熊楠」『熊楠研究』7, pp.42-60.
- スミス, ダグラス・スターラー, ダニエル・ガーンジー, デブラ・バンクス・エド. 2006「イエローストーン国立公園へのオオカミ再導入」マッカーロー, デール・梶光一・山中正実編『知床とイエローストーン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』pp.73-86
- 武内和彦・奥田直久 2014「自然とともに生きる：自然共生社会とはなにか」武内和彦・渡辺綱男編『日本の自然環境政策：自然共生社会をつくる』東京大学出版会。
- 田口洋美 2015「列島開拓とオオカミの絶滅：富士山麓の事例から」『季刊 東北学 (第3期)』6, pp.38-60.
- 田中芳男 1875『動物訓蒙初編』博物館。
- 俵浩三 1979 [1987]『北海道の自然保護：その歴史と思想 (増補版)』北海道大学図書刊行会。
- 俵浩三 2008『北海道・緑の環境史』北海道大学出版会。
- ダン, エドウィン [孤筈生 (西川吉之助) 訳] 執筆年月日不明 [1930]「狼とバツタ」『太湖』56, p.6.
- 直良信夫 1941『日本産獣類説話』山岡書店。
- 直良信夫 1965『日本産狼の研究』校倉書房。
- 中川裕 1997『アイヌの物語世界』平凡社。
- 中沢智恵子 2010「明治時代東北地方におけるニホンオオカミの駆除」『フォレスト・コール』13, pp.18-21.
- 中村生雄 2010『日本人の宗教と動物観：殺生と肉食』吉川弘文館。
- 中村一恵 1998「オオカミの分布と地理的変異」神奈川県立生命の星・地球博物館編『特別展図録オオカミとその仲間たち：イヌ科動物の世界』pp.49-53.
- 中村一恵 2005「ニホンオオカミの頭骨記録」『神奈川県立博物館研究報告：自然科学』33, pp.91-96.
- 中村一恵 2005「江戸中期・諸国産物帳に記載されたイヌ属動物の名称」『神奈川県立博物館研究報告：自然科学』34, pp.69-73.
- 中村一恵 2014「ニホンオオカミとアカオオカミの起源と種分化に関する考察」『神奈川県立博物館研究報告：自然科学』43, pp.23-32.
- パチュラー, ジョン 1925『アイヌ人とその説話』富貴堂書房。
- 八田三郎 1910「動物の分布上北海道の位置」『動物学雑誌』256, pp.43-47.
- 八田三郎 1913「北海道の狼：口絵及図版」『動物学雑誌』291, 口絵。
- 羽山伸一 2006「再導入という自然再生事業」『地域再生の環境学』pp.97-123.
- 菱川晶子 2003「オオカミ：名称についての一考察」『伝承文化研究』2, pp.18-42.
- 平岩米吉 1935「狼と山犬の辯」『動物文学』6, pp.52-53, 築地書館。
- 平岩米吉 1946「日本狼・解説」『動物文学』99, pp.1-13, 築地書館。
- 平岩米吉 1974「ニホンオオカミはもういない：その残存説六十六年の記録」『野生からの声——アニ

- マ』19, pp.44-54, p.78.
- 平岩米吉 1981『狼：その生態と歴史』築地書館。
- 本田優子 2004「アイヌ口承文芸にあらわれる衣服について」『北海道立アイヌ民族研究文化センター研究紀要』10, pp.33-67.
- 増田隆一 1999「ブラキストン線（津軽海峡）に関する食肉類の生物地理と遺伝的特徴」『哺乳類科学』39(2), pp.351-358.
- マッカロー, デール・梶光一・山中正実編『知床とイエローストーン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』pp.13-19.
- マッカロー, デール. 2006「知床・イエローストーン国立公園比較への序論」マッカロー, デール・梶光一・山中正実編『知床とイエローストーン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』pp.13-19.
- 丸山直樹・ビートたけし 2014「達人対談：オオカミ復活で生態系を取り戻せ」『新潮45』33(5)pp.276-287.
- 宮本典子 2001「現存する6体のニホンオオカミの剥製とその頭骨に見られる形態の研究」『和歌山大学教育学部紀要：自然科学』51, pp.23-32.
- 村田庄次郎 1910『札幌博物館案内』維新堂。
- 山田伸一・堀繁久・水島末記 2001『豆本30 北海道開拓記念館第130回テーマ展：開拓史とエゾオオカミ』北海道開拓記念館。
- 山田伸一 2002「オオカミ・ヒグマ・カラス：明治期北海道における「有害鳥獣獲殺手当」をめぐる」『北海道開拓記念館調査報告』41, pp.67-92, 北海道開拓記念館。
- 山田伸一 2011『近代北海道とアイヌ民族：狩猟規制と土地問題』北海道大学出版会。
- 山中正実・梶光一 2006「イエローストーンからの提言を受けて」デール・R・マッカロー, 梶光一, 山中正実編『世界自然遺産 知床とイエローストーン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』pp.175-182.
- 吉川國男 2004「ニホンオオカミ研究の現状と今後」野外調査研究所編『狼：伝承と科学』pp.49-58.
- 米田政明・阿部永 1976「エゾヒグマ *Ursus arctos yesoensis* の頭骨における性的二型および地理的変異について」『北海道大学農学部邦文紀要』(9)pp.265-276.
- 米田政明 2006「知床に再導入したオオカミを管理できるか」『知床博物館研究報告』27, pp.1-8.

洋文献

- Harper, Francis. 1945. Extinct and vanishing mammals of the Old World. New York, American Committee for International Wild Life Protection.
- Kishida Kyukichi 1931 "Notes on Yesso Wolf" 『蘭山會機関雑誌 LANSANIA Journal of Arachnology and Zoology』25, pp.72-75.
- Zoological Society of London 1878 "On a new Philippine Genus and Species of Bird", Proceedings of The Zoological Society of London. 46(1), pp.114-120.
- Newell, Josh. 2004 The Russian Far East: A Reference Guide for Conservation and Development. Daniel & Daniel Pub.
- Pocock, R.I. 1935, "The race of *Canis lupus*", Proceedings of the Zoological Society of London. 105(3), pp.647-684.
- Sato, Yoshikazu. Nakamura, Hidetsugu. Ishifune Yuka and Ohtaishi, Noriyuki. 2011 "Short Communication; The white-colored brown bears of the Southern Kurils" Ursus 22(1), pp.84-90.

新聞

朝日新聞 2004「エゾオオカミ，実は北海道犬？札幌で保存の剥製を鑑定」『朝日新聞』，2004年6月12日，夕刊，8面。

西田浩雅 1999「サハリン オオカミ繁殖の可能性も」『北海道新聞』1999年3月24日，朝刊，6面。

北海道新聞 2003「絶滅エゾオオカミ 子のはく製!? 札幌・大通小で保存」『北海道新聞』，2003年1月30日，朝刊，33面。

インターネット

Biodiversity Heritage Library <http://www.biodiversitylibrary.org/> (2015年8月30日最終確認)

CiNii Articles <http://ci.nii.ac.jp/> (2015年8月30日最終確認)

KAKEN <https://kaken.nii.ac.jp/> (2015年8月30日最終確認)

Sakhalin Regional Museum (作成年不明) “PLANT AND ANIMAL LIFE”

http://en.sakhalinmuseum.ru/expo_3.php (2015年8月30日最終確認)

Webcat Plus <http://webcatplus.nii.ac.jp/> (2015年8月30日最終確認)

近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/> (2015年8月30日最終確認)

国立国会図書館蔵書検索・申込システム <https://ndlopac.ndl.go.jp> (2015年8月30日最終確認)

国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/> (2015年8月30日最終確認)

国立情報学研究所 GeNii 担当 2014「【お知らせ】学術コンテンツ・ポータル (GeNii ジーニイ) の終了等サービスの一部見直しについて」<http://www.nii.ac.jp/content/2014/02/2014-02-03.html> (2015年8月30日最終確認)

第135回日本獣医学会学術集会事務局 2003「プログラム・講演抄録」<http://www.vm.a.u-tokyo.ac.jp/yakuri/135/youshi/AkaibouF.pdf> (2015年8月30日最終確認)